



いなか、の、じけん

夢野久作



青空文庫



青空
文庫

大きな手がかり

村長さんの処の米倉から、白米を四俵ひょう盗んで行つたものがある。

1 いなか、の、じけん

あくる朝早く駐在の巡査おまわりさんが来て調べたら、俵たわらを積んで行つたらしい車の輪のあとが、雨あがりの土にハッキリついていた。そのあとをつけて行くと、町へ出る途中の、とある村外はずれの一軒屋の軒下に、その米俵を積んだ車が置いてあつて、その横の縁台の上に、

頬冠ほおかぶりをした男が大の字になつて、グウグウとイビキをかいていた。引つ捕えてみるとそれは、その界限で持てあまし者の博奕ぼくちう打ちであつた。

博奕ぼくちう打ちは盗んだ米を町へ売りに行く途中、久し振りに身体からだを使つてクタビレたので、チョットのつもりで休んだのが、思わず寝過ぎたのであつた。

腰縄を打たれたまま車を引っぱつてゆく男の、うしろ姿を見送つた人々は、ため息して云つた。

「わるい事は出来んなあ」

按摩あんまの昼火事

五十ばかりになつて一人住居ずまいをしている後家ごけさんが、ひる過ぎに近所まで用足しに行つて帰つて来ると、開け放しにしておいた自分の家うちの座敷のまん中に、知り合いの按摩あんまがラムプの石油を撒まいて火を放つけながら、煙むに噎むせて逃げ迷つている……と思う間もなく床柱に行き当つて引っくり返つてしまつた。

後家さんは、めんくらつた。

「按摩さんが火事火事」

と大声をあげて村中を走りまわったので、忽ち人たちまが寄って来て、大事に到らずに火を消し止めた。気絶した按摩は担かつぎ出されて、水をぶっかけられるとすぐに蘇生したので、あとから駆けつけた駐在巡査に引渡された。

大勢に取り捲かれて、巡査の前の地べたに坐った按摩は、水みず洩ぼなをこすりこすりこう申し立てた。

「まったくの出来心で御座います。声をかけてみたところが留守だとわかりましたので……」

「それからどうしたか」

と巡査は鉛筆を嘗^なめながら尋ねた。皆はシンとなつた。

「それで台所から忍び込みますと、ランプを探り当てましたので、その石油を撒いて火をつけましたが、思いがけなく、うしろの方からも火が燃え出して熱くなりましたので、うろたえまして……雨戸は閉まっておりますし、出口の方角はわからず……」

きいていた連中がゲラゲラ笑い出したので、按摩は不平らしく白い眼を剥^むいて睨^{にら}みまわした。巡査も吹き

出しそうになりながら、ヤケに鉛筆を舐めまわした。

「よしよし。わかつとるわかつとる。ところで、どう
いうわけで火を放けたんか」

「へエ。それはあの後家めが」

と按摩は又、そこいらを睨みまわしつつ、土の上で
一膝進めた。

「あの後家めが、私に肩を揉ませるたんびに、変なこと
を云いかけるので御座います。そうしてイザとなると
手ひどく振りますので、その返報に……」

「イイエ、違います。まるでウラハラです……」

と群集のうしろから後家さんが叫び出した。

みんなドツと吹き出した。巡査も思わず吹き出した。しまいには按摩までが一緒に腹を抱えた。

その時にやつと後家さんは、云い損ないに気が付いたららしく、生娘きむすめのように真赤になったが、やがて袖に顔を当てるとワーツと泣き出した。

夫婦の虚空蔵こくうぞう

「あの夫婦は虚空蔵さまの生れがわり……」

という子守娘の話を、新任の若い駐在巡査がきいて、
「それは何という意味か」

と問い訊ただしてみたら、

「生んだ子をみんな売りこかして、うまいものを喰う
て酒を飲まっしやるから、コクウゾウサマ……」

と答えた。巡査はその通り手帳につけた。それから

その百姓の家に行つて取り調べると、五十ばかりの夫婦が二人とも口を揃えて、

「ハイ。みんな美しい着物を着せてくれる人の処へ行きたいと申しますので……」

と済まし返っている。

「フーム。それならば売った時の子供の年齢は……」

「ハイ。姉が十四の年で、妹が九つの年。それから男の子を見世物師に売ったのが五つの年で……。へエ。」

証文がどこぞに御座いましたが……間違いは御座いません。ついこの間のことで御座いますから。へエ

……」

巡査はこの夫婦が馬鹿ではないかと疑い初めた。しかも、なおよく気をつけてみると、今一人の子供が女房の腹の中に居るようす……。

巡査は変な気持ちになつて帳面を仕舞しまいながら、「フーム。まだほかに子供は無いか」

と尋ねると、夫婦は忽ち真青になつてひれ俯した。

「実は四人ほど墮胎おろしましたので……喰うに困りました……どうぞ御勘弁を——」

巡査は驚いて又帳面を引き出した。

「ウーム不都合じゃないか。何故そんな勿体ないことをする」

というと、青くなっていた亭主が、今度はニタニタ笑い出した。

「へへへへへへ。それほどでも御座いませぬ。酒さえ飲めばいくらでも出来ますので……」

巡査は気味がわるくなつて逃げるようにこの家を飛うちび出した。

「この事を本署に報告しましたら古参の巡査から笑われましたヨ。何でも墮胎罪で二度ほど処刑されている

評判の夫婦だそうです。二人とも揃って低能らしいので、誰も相手にしなくなっていたのだそうです」

と、その巡査の話。

汽車の実力試験

「この石を線路に置いたら、汽車が引っくり返るか返らないか」

「馬鹿な……それ位の石はハネ飛ばして行くにきまつとる」

「インニヤ……引き割って行くじやろうて……」

「論より証拠やってみい」

「よし来た」

間もなく来かかった列車は、轟然ごうぜんたる音響と共に、その石を粉碎して停車した。見物していた三人の青年は驚いて逃げ出した。

あくる朝三人が、村の床屋で落ち合つてこんな話をした。

「昨日きのうは恐ろしかったな。あんまり大きな音がしたもんで、おらあ引っくり返ったかと思うたぞ」

「ナアニ。機関車は全部鉄造りじゃけにな。あんげな石ぐらい屁へでもなかる」

「しかし、引き砕いてから停まったのは何故じゃるか。

車の歯でも欠けたと思つたんかな」

「ナア二。人を轢ひいたと思つたんじやろ」

こうした話を、頭を刈らせながらきいていた一人の男は、列車妨害の犯人捜索に来ていた刑事だったので、すぐに三人を本署へ引っぱって行つた。

その中の一人は署長の前でふるえながらこう白状した。

「三人の中で石を置いたのは私で御座います。けれどもはね飛ばしてゆくとばかり思つておりましたので……罪は一番軽いので……」

と云い終らぬうちに巡査から横面よこつらを喰くらわせられた。
三人は同罪になった。

スットントン

漁師の一人娘で生れつきの盲目めくらが居た。色白の丸ポ
チャで、三味線なら何でも弾ひくのが自慢だったので、
方々の寄り合い事に、芸者代りに雇われて重宝がられ
ていた。

ある時、近くの村の青年の寄り合いに雇われたが、
案内あきに来た青年は馬方うまかたで、馬力ばりきの荷物うしろの方かたに
空所あきを作つて、そこに座布団を敷いて、三味線と、下

駄を抱えた女を乗せると、最新流行のストントン節を唄いながら、白昼の国道を引いて行つた。

ところがその馬力が、正午過ぎひるに村へ帰りつくると、荷物のうしろには座布団だけしか残っていないことが発見されたので、忽ち大騒ぎになつた。

「途中の松原で畜生が小便した時までは、たしかに女が坐つておつた」

という馬方の言葉をたよりに、村中総出でそこいらの沿道を探しまわつたが、それらしい影も無い。村長や、区長や、校長先生や巡査が青年会場に集まつて、

いろいろに首をひねったけれども、第一、居なくなつた原因からしてわからなかつた。

結局、娘の親たちへ知らせなければなるまい……というので、とりあえず青年会員が二人、娘のうちへ自転車を乗りつけると、晴れ着をホコリダラケにしたその娘が、おやじに引き据えられて、泣きながら打たれている。

二人の青年は顔を見合わせたが、ともかくも飛び込んで押し止めて、

「これはどうした訳ですか」

と尋ねると、おやじは面目なさそうに頭を掻いた。

「ナア一。こいつがこの頃流行るスツトントンという歌を知らんちうて逃げて帰つて来たもんですけに……どうも申訳ありませんで……」

二人の青年はいよいよ訳がわからなくなつた。そこで、なおよく事情をきいてみると、最前女を馬力に乗せて引いて行つた青年が、途中でスツトントン節をくり返しくり返し唄つた。それは娘に初耳であつたので、先方で弾かせられては大変と思つて、一生懸命に耳を澄ましたが、あいにくその青年が調子外れ（音痴）だつ

たので、歌の節が一々変テコに脱線して、本当の事がよくわからない。これではとても記憶おぼえられぬと思うと、女心のせつなさに、下駄と三味線を両手に持って、死ぬる思いで馬力から飛び降りて逃げ帰ったものと知れた。

青年の一人はこの話をきくと非常に感心したらしく、勢い込んで云った。

「実に立派な心がけです。しかし心配することはない。私たちと一緒に来なさい。これから夜通しがかかりで青年会をやり直します。歌は途中で私が唄ってきかせま

花嫁の舌喰い

一部落挙こぞつて、不動様を信心していた。

その中で、夫婦と子供三人の一家が夕食の最中に、主人が箸はしをガラリと投げ出して、

「タツタ今おれに不動様が乗り移った」

と云いつつ凄い顔をして坐り直した。お神かみさんは慌てて畳の上にひれ伏した。ビツクリして泣き出した三人の子ども、叱りつけて拜ました。

この噂うわさが伝わると、そこいらじゆうの信心家が、あ
とからあとから押しかけて来て「お不動様」の御利益ごりやく
にあずかろうとしたので、家の中は夜通し寝ることも
出来ないようになった。

そのまん中に、木綿の紋付き羽織を引っかけた不動
様が坐つて、恐ろしい顔で睨みまわしていたが、やが
て、うしろの方に坐っている、紅化粧した別嬪べっぴんをさし
招いた。その女は二三日前近所へ嫁入つて来たもので
あつた。

「もそつと前へ出る。出て来ぬと金縛りに合わせるぞ。

ズツと私の前に来い。怖がる事はない。罪を浄めてやるのだ。サアよいか。お前は前の生しょうに恐ろしい罪を重ねている。その罪を浄めてやるから舌を出せ。もそつと出せ。出さぬと金縛りだぞ……そうだそうだ……」

こう云いつつその舌に顔をさし寄せて、ジツと睨んでいた不動様は、不意にパクリとその舌を頬張ると、ズルリズルリとシャブリ初めた。

女は衆人環視の中で舌をさし出したまま、眼を閉じてブルブルふるえていた。すると不動様は何と思つたか突然に、その舌を根元からプツツリと噛み切つて、

グルグルと嘔^のみ込んでしまった。

女は悶絶したまま息が絶えた。

あとで町から医者や役人が来て取調べた結果、不動様の脳髓がずっと前から梅毒に犯されていることがわかった。

この事実がわかると、その村の不動様信心がその後パツタリと止んだ。不動様を信仰すると梅毒になるというので……。

感違いの感違い

駐在巡査が夜ふけて線路の下の国道を通りかかると、
頬冠ほおかぶりをした大男が、ガードの上をスタスタと渡つて
行く。何者だろう……とフト立ち停まると、その男が
一生懸命に逃げ出したので、巡査も一生懸命に追跡を
初めた。

やがてその男が村の中の、とある物置へ逃げ込んだ
ので、すぐに踏み込んで引きずり出してみると、それ

は村一番の正直者で、自分の家の物置に逃げ込んだものであることがわかった。

巡査はガツカリして汗を拭き拭き、

「馬鹿めが。何もしないのに何でおれの姿を見て逃げた」

と怒鳴りつけると、その男も汗を拭き拭き、

「ハイ。泥棒と間違えられては大変と申しましたので……どうぞ御勘弁を……」

スウィートポテト

心中のし損ねが村の駐在所に連れ込まれた……とい
うのでみんな見に行つた。

十燭しよくの電燈に照らされた板張りの上の小さな火鉢
に、消し炭が一パイに盛られている傍に、男と女が寄
り添そうようにして跼うずくまって、濡ぬれくたれた着物の袖そでを
焙あぶっている。どちらも都の者らしく、男は学生式の
オールバックで、女は下町風の桃割れに結っていた。

ガラス

硝子戸の外からのぞき込む人間の顔がふえて来るに

つれて、二人はいよいよよくつつき合つて頭を下げた。

やがて四十四五に見える駐在巡查が、ドテラがけで悠然と出て来た。一パイ飲んだらしく、赤い顔をピカピカ光らして、二人の前の椅子にドツカリと腰をかけると、酔眼朦朧とした身体からだをグラグラさせながら、いろんな事を尋ねては帳面につけた。そのあげくにこう云つた。

「つまりお前達二人はスウィートポテトであつたのじゃナ」

硝子戸の外の暗やみの中で二三人クスクスと笑った。

すると、うつむいていた若い男が、濡れた髪毛かみのけを右手でパツとうしろへはね返しながら、キツと顔をあげて巡查を仰いだ。異状に興奮したらしく、白い唇をわななかしてキツパリと云った。

「……違います……スウィートハートです……」

「フフ——ウム」

と巡查は冷やかに笑いながらヒゲをひねった。

「フ——ム。ハートとポテトとはどう違うかな」

「ハートは心臓で、ポテトは芋いもです」

と若い男はタタキつけるように云ったが、硝子戸の外でゲラゲラ笑い出した顔をチラリと見まわすと、又グツタリとうなだれた。

巡査はいよいよ上機嫌らしくヒゲを撫でまわした。「フフフフフ。そうかな。しかしドツチにしても似たもんじやないかな」

若い男は怪訝けげんな顔をあげた。硝子戸の外の笑い声も同時に止んだ。巡査は得意らしく反そり身みになった。

「ドツチもいらざるところで芽を吹いたり、くつつき合うて腐れ合うたりするではないか……アーン」

人が居なくなつたかと思う静かさ……と思う間もなく、硝子戸の外でドツと笑いの爆発……。

若い男はハツと両手を顔にあてて、ブルブルと身をふるわした。初めから嘲弄されていたことがわかつたので……同時に、横に居た桃割れも、ワツとばかり男の膝に泣き伏した。

硝子戸の外の笑い声が止め度もなく高まつた。

巡査も腕を組んだまま天井をあおいだ。

「アアハアハアハア。馬鹿なやつどもじゃ。アアハアアアハア……」

空家あきやの傀儡踊あやつり

みんな田の草を取りに行つていたし、留守番の女子供も午睡ひるねの真最中であつたので、只さえ寂さびれた田舎町の全体が空ツポのようにヒツソリしていた。その出外れの裏表二間ふたまをあけ放した百姓家の土間に、一人の眼のわるい乞食こじきじい爺が突立って、見る人も無く、聞く人も無いのにアヤツリ人形を踊らせている。

人形は鼻の欠けた振り袖ふ姿そでで、色のさめた赤い鹿かの

子を頭からブラ下げていた。

「観音シャマを、かこいつウけエて——。会いに——
来たンやンら。みんなンミンやンら。……振りイ——
の——たンもンとンにイ——北ンしよぐウれエ。晴れ
ン間まも——。さんら——にイ……。な——かア……。」

齒の抜けた爺さんの義太夫はすこぶる怪しかったが、
それでもかなり得意らしく、時々霞かすんだ眼を天井に向
けては、人形と入れ違いに首をふり立てた。

「へ——イ。このたびは二の替りといたしまして朝顔
日記大井川の段……テテテテ天道てんどうシャマア……きこ

えまシエぬきこえまシエぬきこえまシエぬ……チン
……きこえまシエぬわいニヨ——チツチツチツチツ

「妻ア——ウワア。なんみんだんにイ——。か——き
——くンるえ——テへへへへ。シヨレみたんよ……光^{みつ}
ウ秀^{ひで}エドンの……」

振り袖の人形が何の外題^{げだい}でも自由自在に次から次へ
踊って行くにつれて、爺さんのチョボもだんだんとき
れとぎれに怪しくなつて行つた。

しかし爺さんは、どうしたものかなかなか止めな
かった。ヒツソリした家の中で汗を拭き拭きシヤ噎^がれ

た声を絞りつづけたので、人通りのすくない時刻ではあつたが、一人立ち止まり二人引つ返ししているうちに、近所界隈の女子供や、近まわりの田に出ていた連中で、表口が一パイになつて来た。

「狂人きちがいだらう」

と小声で云うものもあつた。

そのうちに誰かが知らせたものと見えて、この家の若い主人が帰つて来た。手足を泥だらけにした野良のらぎ着のままであつたが、肩を聳そびやかして土間に這入はいるとイキナリ、人形をさし上げている爺さんの襟首えりくびに手をか

けてグイと引いた。振袖人形がハツと仰天した。そうして次の瞬間にはガツクリと死んでしまった。

見物は固唾かたずをのんだ。どうなることか……と眼を瞠みはりながら……。

「……ヤイ。キ……貴様は誰にことわつて俺の家うちへ這入った……こんな人寄せをした……」

爺さんは白い眼を一パイに見開いた。口をアングリとあけて呆然となつたが、やがて震える手で傍かたわらの大きな信玄袋の口を拡げて、生命いのちよりも大切だいじそうに人形を抱え上げて落し込んだ。それから両手をさしのべて、

破れた麦稗帽子むぎわらと竹の杖を探りまわし初めた。

これを見ていた若い主人は、表に立っている人々をふり返ってニヤリと笑った。人形を入れた信玄袋をソツと取り上げて、うしろ手に隠しながらわざと声を大きくして怒鳴った。

「サア云え。何でこんな事をした。云わないと人形を返さないぞ」

何かボソボソ云いかけていた見物人が又ヒツソリと
なつた。

麦稗帽を阿弥陀あみだに冠かぶつた爺さんは、竹の杖を持った

ままガタガタとふるえ出した。ペツタリと土間に坐りながら片手をあげて拝む真似をした。

「……………どうぞお助け……………御勘弁を……………」

「助けてやる。勘弁してやるから申し上げろ。何がためにこの家に這入ったか。何の必要があれば……………最前からアヤツリを使つてコンナに大勢の人を寄せたのか。ここを公会堂とばし思つてした事か」

爺さんは見えぬ眼で次の間まをふり返つて指さした。

「……………サ……………最前……………私が……………このお家に這入りまして……………人形を使い初めますと……………ア……………あそこに居ら

れたどこかの旦那様が……イ……一円……ク下さいま
 して……へイ……おれが飯を喰っている間に……貴様
 が知っているだけ踊らせてみよ……トト、……おつ
 しゃいましたので……へイ……オタスケを……」
 「ナニ……飯を喰ったア……一円くれたア……」

若い主人はメンクラツたらしく眼を白黒さしていた
 が、忽ち青くなつて信玄袋を投げ出すと、次の間の上
 りかまち框に駈け寄つた。そこにひろげられた枕屏風の蔭に、
 空つぽの飯櫃めしびつがころがって、無残に喰い荒された漬物
 の鉢と、土瓶どびんと、箸はしとが、飯粒めしつぶにまみれたまま散ら

ばっている。そんなものをチラリと見た若い主人の眼は、すぐに仏壇の下に移ったが、泥足のままかけ上つて、半分開いたまんまの小抽出しを両手でかきまわした。

「ヤラレタ……」

と云ううちに見る見る青くなつてドツカリと尻餅を突いた。頭を抱えて縮み込んだ。表の見物人はまん丸にした眼を見交みかわした。

「……マア……可哀相に……留守番役のおふくろが死んだもんじゃけん」

「キット流れ渡りの坑夫のワルサじやろ……」

その囁きささやくを押しわけてこの家の若い妻君が帰つて来た。やはり野良行きの姿であつたが、信玄袋を探し当てるて出て行く乞食爺の姿を見かえりもせず、泥足のままツカツカと畳の上にあがると、若い主人の前にベツタリと坐り込んだ。頭の手拭を取つて鬢びんのほつれを搔き上げた。無理に押しつけたような声で云つた。

「お前さんは……お前さんは……この小抽出しに何を
入れておんなさつたのかえ……妾わたしに隠して……一口も
云わないで……」

若い主人はアグラを搔いて、頭を抱えたまま、返事をしなかつた。やがて濡れた筒ツポウの袖口で涙を拭いた。

下唇を噛んだまま、ジツとこの様子をながめていた妻君の血相がみるみる変つて来た。不意に主人の胸倉むなぐらを取ると、猛烈に小突きまわし初めた。

「……えエツ。口惜しいッ。おおかた大浜しらくびまち（白首街）の

アンチキシヨウの処へ持つて行く金じやつたる。畜生

畜生……二人で夜の眼を寝ずに働いた養蚕ようさんの売り上げ

をば……いつまでも渡らぬと思うておつたれば……エ

エツ……クヤシイ、クヤシイ」

しかしいくら小突かれても若い主人はアヤツリのようになだれて、首をグラグラさせるばかりであった。二三人見かねて止めに這入つて来たが、一番うしろの男は表の人だかりをふり返つて、ペロリと赤い舌を出した。

「これがホンマのアヤツリ芝居じゃ」

みんなゲラゲラ笑い出した。

妻君が主人の胸倉を取つたままワーツと泣き出した。

一ふく三杯

お安さんというひとりもの独身者で、村一番の吝けち坊ぼうの六十婆さんが、鎮守様のお祭りの晩に不思議な死にようをした。

……たつた一人で寝起きをしている村外れの茶屋のかまど竈の前で、瘦せ枯かれた小さな身体からだが虚空こくうを掴んで悶絶ひもしていた。平生腰帯ふだんにしていた絹のボロボロの打ち紐ひもが、皺しわだらけの首に三廻みまわりほど捲かれて、ノドボトケの処

で唐結からむすびになつたままシツカリと肉に喰い込んでいたが、その結び目の近まわりが血だらけになるほど掻き撈むしられている。しかし何も盗まれたもようは無く、外から人の這入つた形跡も無い。法印さんの処から貰つて帰つたお重詰めは、箸をつけないまま煎餅布団せんべいぶとんの枕元に置いてあつた。貯金の通い帳かよ ちようは方々探しまわつたあげく、竈の灰の下の落し穴から発見された。その遺産を受け継ぐべき婆さんのたつた一人の娘と、その婿になつている電工夫は、目下東京に居るが、急報によつて帰郷の途中である。婆さんの屍体は大学で解剖

することになった……近來の怪事件……といふので新聞に大きく出た。

お安婆さんの茶店は、鉄道の交叉点のガードの横から、海を見晴らしたところにあつた。古ぼけた葎よしず簧張りの下に、すこしばかりの駄菓子とラムネ。渋茶を煮出した真黒な土瓶。剥げた八寸膳の上に薄汚ない茶碗が七ツ八ツ……それでも夏は海から吹き通しだし、冬の日向きがよかつたので、街道通いの行商人なぞがスツカリなじみ狃染なじみになつていた。

主人公の婆さんは三十いくつかの年に罹かかつた熱病以

来、腰が抜けて立ち居たが不自由になると、生れて間もない娘を置き去りにして亭主が逃げてしまったので、田嶋を売り払ってここで茶店を開いた。その娘がまたなかなかの別嬪べっぴんの利発もので、十九の春に、村一番の働き者の電工夫を婿養子に取ったが、今は夫婦とも東京の会社につとめて月給を貰っているとか。

「その娘夫婦が東京に孫を見に来い見に来いと云いますけれども、まあなるたけ若い者の足手まといになるまいと思うて、この通りどうやらこうやらしております。自分の身のまわりの事ぐらいは足腰が立ちますの

で……娘夫婦もこの頃はワタシに負けて、その中に孫うぢを見せに帰つて来ると云うておりますが……」

と云いながら婆さんは、青白い頬をヒクツカせて、さも得意そうにニヤリとするのであつた。

「……フフン。それでも独りで淋しかる……」

と聞き役になつたお客が云うと、婆さんは又、オキマリのようになんこう答えた。

「へエあなた。二度ばかり泥棒が這入りましてなあ。貴様は金を溜めているに違いないと申しましたけれどもなあ。ワタシは働いたお金をみんな東京の娘の処に

送っております。それでも、あると思うならワタシを殺すなりどうなりしてユツクリと探しなさいと云いましてので、茶を飲んで帰りました」

しかしこの婆さんが千円の通い帳を二ツ持っているという噂を、本当にしないものは村中に一人も居なかつた。それ位にこの婆さんの吝ン坊は有名で、殆んど喰うものも喰わずに溜めていると云つてもいい位であつた。そんな評判がいろいろある中にもうち小学校の生徒まで知っているのは「お安さん婆さんの一服三杯」という話で……。

「フフン。その一服三杯というのは飯のことかね……」
と村の者の云うことをきいていた巡査は手帳から眼を離した。

「へエ。それはソノ……とても旦那方にお話し致しましても本当になさらないお話で……しかしあの婆さんが死にましたのは、確かにソノ一服三杯のおかげに違いないと皆申しておりますが……」

「フフン。まあ話してみろ。参考になるかもしれん」

「へエ。それじゃアまあお話ししてみますが、あの婆さんは毎月一度宛^{ずつ}、駅の前の郵便局へ金を預けに行く

時のほかは滅多に家を出ません。^{うち}いつもたつた一人で、あの茶店に居るので御座いますが、それでも村の寄り合いとか何とかいう御馳走ごとにはキット出てまいります。それも前の晩あたりから飯を食わずに、腹をペコペコにしておいて、あくる日は早くから店を閉めて、松葉杖を突張って出て来るので御座いますが、いよいよ酒の座となりますと、先ず猪口^{ちよこ}で一パイ飲んで、あの青い顔を真赤にしてしまいます。それから飯ばっかりを喰い初めて、時々お汁^{したじ}をチュツチュツと吸います。漬け物もすこしは喰べますが、大抵六七八杯は請け合

いのようにで……それからいよいよ喰えぬとなりますと、煙草を二三服吸うて、一息入れてから又初めますので、アラカタ二三杯位は詰めこみます。それからあとのおひら平や煮つけなどを、飯と一緒に重箱に一パイ詰めて帰つて、その日は何もせず、あくる日の夕方近くまで寝ます。それからポツポツ起きて重箱の中のものをつ突つて夕飯にする。御承知の通り、この辺の御馳走ごとの寄り合いは、大抵時候のよい頃に多いので、どうかすると重箱の中のもの、その又あくる日の夕方までありますそうで……つまるところ一度の御馳走が

十ペン位の飯にかけ合うことに……」

「ウ——ム。しかしよく食傷して死なぬものだな」

「まったくで御座います旦那様。あの痩せこけた小さな身体からだに、どうして這入るかと思うくらいで……」

「ウ——ム。しかしよく考えてみるとそれは理窟に合わんじやないか。そんなにして二日も三日も店を閉めたら、つまるところ損が行きはせんかな」

「へエ。それがです旦那様。最前お話し申上げましたその娘夫婦も、それを恥かしがって東京へ逃げたのだそうでございますが、お安さん婆さんに云わせますと

……『自分で作ったものは腹一パイ喰べられぬ』というのだそうで……ちようどあの婆さんが死にました日
が、ここいらのお祭りで御座いましたが、法印さんの
処で振舞いがありましたので、あの婆さんが又『一服
三杯』をやらかしました。それが夜中になつて口から
出そうになつたので勿体なさに、紐ひもでノド首しぼを縛つた
ものに違いない。そうして息が詰まつて狂い死にをし
たのだらう……とみんな申しておりますが……」
「アハハハハハ。そんな馬鹿な……いくら吝けちン坊ぼうでも
……アツハツハツハツ……」

巡査は笑い笑い手帳と鉛筆を仕舞って帰った。

しかしお安さん婆さんの屍体解剖の結果はこの話と
ピッタリ一致したのであった。

あり
はえ
蟻と蠅

山の麓に村一番の金持ちのお邸やしきがあつて、そのままを十軒ばかりの小作人の家に取り巻いて一部落を作つていた。

お邸の裏手から、山へ這入るところに柿の樹と、桑の畑があつたが、梅雨つゆがあけてから小作人の一人が山へ行きかかると、そこの一番大きい柿の樹の根方から、赤ん坊の足が一本洗い出されて、蟻と蠅が一パイにた

かっているのを発見したので真青になって飛んで帰った。

やがて駐在所から、新しい自転車に乗った若い巡査がやって来て掘り出してみると、六ヶ月位の胎児で、死後一週間を経過していると推定されたので、いくらもないその部落の中の女が一人一人に取り調べられたが、怪しい者は一人も居なかつた。結局残るところの嫌疑者は、この頃、都の高等女学校から帰省して御座る、お邸のお嬢さん只一人……しかもすこぶるつきのハイカラサンで、大旦那が遠方行き留守中を幸いに、

ゴロゴロ寝てばかり御座る様子がどうも怪しいということになった。

若い巡査は或る朝サアベルをガチャガチャいわせてそのお邸の門を潜った。

「ソラ御座った。イヨイヨお嬢さんが調べられさつしやる」

と家中うちじゅうのものが鳴りを静めた。野良のらからこの様子を見て走って来るものもあつた。

玄関に巡査を出迎えて、来意をきいた娘の母親が、血の気の無くなつた顔をして隠居部屋に来てみると、

細帯一つで寝そべって雑誌を読んでいた娘は、白粉の残った顔を撫でまわしながら蓬々たる頭を擡もたげた。

「何ですって……妾わたしが墮胎だたいしたかどうか巡査が調べに来ているんですって……ホホホホ生意気な巡査だわネエ。アリバイも知らないで……」

玄関に近いので母親はハラハラした。眼顔で制しながら恐る恐る問うた。

「……ナ……何だえ。その蟻とか……蠅とかいうのは……アノ胎児はらみこの足にたかっていた虫のことかえ……」

「ホホホホそんなものじゃないわよ。何でもいい

から巡査さんにそう云つて頂戴……妾にはチャンとしたアリバイがありますから、心配しないでお帰んなさいッテ……」

母親はオロオロしながら玄関に引返した。

しかし巡査は娘の声をきいていたらしかった。少々興奮の体ていで仁王立ちになつて、ポケットから手帳を出しかけていたが、母親の顔を見るとまだ何も云わぬ先にグツと睨みつけた。

「そのアリバイとは何ですか」

母親はふるえ上つた。よろめきたおれむばかりに娘

のところへ駆け込むと、雑誌の続きを読みかけていた娘は眉根を寄せてふり返った。

「ウルサイわねえ。ホントニ。そんなに妾が疑わしいのなら、妾の処女膜を調べて御覧なさいッて……ソウおつしやい……失礼な……」

母親はヘタヘタと坐り込んだ。巡査も真赤になつて自転車に飛び乗りながら、逃げるように立ち去った。

それ以来この部落ではアリバイという言葉が全く別の意味で流行している。

赤い松原

海岸沿いの国有防風林の松原の中に、たくはつぼうず托鉢坊主と
 チョンガレ夫婦とが、向い合わせの蒲鉾かまぼこ小舎ごやを作つて
 住んでいた。

三人は極めて仲がいいらしく、毎朝一緒に松原を出
 て、一里ばかり離れた都会に貫いに行く。そうして帰
 りには又どこかで落ち合つて、何かしら機嫌よく語り
 合いながら帰つて来るのであつた。月のいい晩などは、

よくその松原から浮き上るような面白い音がきこえるので、村の若い者が物好きに覗いてみると蒲鉾小舎の横の空地で、チョンガレ夫婦のペコペコ三味線と四つ竹（肉の厚い竹片を、二枚宛両手に持って、打ち合わせながら囃すもの）の拍子に合わせて、向う鉢巻の坊主が踊っていたりした。横には焚火と一升徳利なぞがあつた。

そのうちに世間が不景気になるにつれて、坊主の方には格別の影響も無い様子であるが、チョンガレ夫婦の貰いが、非常に減つた模様で、松原へ帰る途中でも、

そんな事かららしく、夫婦で口論いさかいをしていることが珍らしくなくなった。或る時なぞは村外れで掴み合いかけているのを、坊主が止めていたという。

ところがそのうちに三人の連れ立った姿が街道に見られなくなつて、その代りに頭を青々と丸めて、法衣ころもを着たチョンガレの托鉢姿だけが、村の人の眼につくようになつた。

……コレは可怪おかしい。和尚おしょうの方は一体何をしているのか……と例によつてオセツカイな若い者が覗きに行つてみると、坊主はチョンガレの女房を、自分の蒲

鉾小屋に引きずり込んで、魚なぞを釣って納まり返っている。夕方にチョンガレが帰って来ても、女房は平気で坊主のところにくつつ付いているし、チョンガレも独りで煮タキして独りで寝る……おおかた法衣ころもと女房の取り換えっこをしたのだらう……というのが村の者の解釈であつた。

ところが又その後のちになるとチョンガレの托鉢姿が、いつからともなく松原の中に見えなくなつた。しかし蒲鉾小舎は以前のまままで、チョンガレの古巢は物置みたように、枯れ松葉や、古材木が詰め込まれていた。

そうして坊主がもとの木阿弥もくあみの托鉢姿に帰つて、松原から出て行くと、女房は女房で、坊主と別々にペコペコ三味線を抱えて都の方へ出かける。夜は一緒に寝ているのであつた。

「坊主も遊んでいられなくなつたらしい」

と村の者は笑つた。

そのうちに冬になつた。

或る夜ケタタマシク村の半鐘が鳴り出したので、人々が起きてみると、その松原が大火焰を噴き出している。アレヨアレヨといううちに西北の烈風に煽られ

て、見る間に数十町歩を烏有うゆうに帰したので、都の消防が残らず駆けつけるなぞ、一時は大変な騒ぎであったが、幸いに人畜に被害も無く、夜明け方に鎮火した。火元は無論その蒲鉾小舎で、二軒とも引き崩して積み重ねて焼いたらしい灰の下から、半焼けの女房の絞殺屍体と、その下の土饅頭どまんじゆうみたようなものの中から、半分骸骨になったチヨンガレの屍体があらわれた。しかもそのチヨンガレの頭蓋骨が掘り出されると、噛み締めた白い歯が自然と開いてあ、中から使いさしの猫イラズズのチューブがコロガリ出たので皆ゾツとさせられた。

郵便局

鎮守の森の入口に、村の共同浴場と、青年会の道場が並んで建っていた。夏になるとその辺で、撃剣の稽古を済ました青年たちが、歌を唄ったり、湯の中で騒ぎまわったりする声が、毎晩のように田圃越たんぼごしの本村ほんむらまで聞こえた。

ところが或る晩の十時過の事。お面めんお籠手こての声が止むと間もなく、道場の電燈がフツと消えて人声一つし

なくなつた。……と思うとそれから暫くして、提灯のちようちん光りが一つ森の奥からあらわれて、共同浴場の方に近づいて来た。

「来たぞ来たぞ」「シツシツ聞こえるぞ」「ナアニ大丈夫だ。相手は耳が遠いから……」

といったような囁きが浴場の周囲の物蔭から聞こえた。ピシヤリと蚊をたたく音だの、ヒツヒツと忍び笑いをする声だのが続いて起つて、又消えた。

提灯の主は元五郎といって、この道場と浴場の番人と、それから役場の使い番という三ツの役目を村から

受け持たせられて、森の奥の廃屋あばらやに住んでゐる親爺おやじで、年の頃はもう六十四五であつたらうか。それが天にも地にもたつた一人の身よりである、お八重やえという白痴の娘を連れて、仕舞湯しまいゆに入りに来たのであつた。

親爺は湯殿に這入ると、天井からブラ下がつてゐる針金を探つて、今日買つて来たばかりの五分心ぶしんの石油ランプを吊して火を灯つけた。それから提灯を消して傍の壁にかけて、ボロボロ浴衣ゆかたを脱ぐと、くの字なりに歪ゆがんだ右足に、黒い膏藥こうやくをベタベタと貼りつけたのを、さも痛そうにランプの下に突き出して撫でまわした。

その横で今年十八になつたばかりのお八重も着物を脱いだが、村一等の別嬪べっぴんという評判だけに美しいには美しかった。しかし、どうしたわけか、その下腹が、奇妙な恰好にムツクリと膨らんでいるために、親爺の曲りくねつた足と並んで、一種異様な対照を作つていたのであつた。

「ホントウダホントウダ」「ふくれとるふくれとる」「ドレドレ俺にも見せろよ」「フーン誰の子だろう」「わかるものか」「俺ア知らんぞ」「嘘吐こけ……お前の女だろうが」「馬鹿云えコン畜生」「シツシツ」

というようなボソボソ話が、又も浴場のまわりで起つた。しかし親爺は耳が遠いので気がつかないらしく、黙つて曲つた右足を湯の中に突込んだ。お八重もそのあとから真似をするように右足をあげて這入りかけたが、フイと思ひ出したようにその足を引っこめると、流し湯へ跼かがんでシャーシャーと小便を初めた。

元五郎親爺はその姿を、霞かすんだ眼で見下したまま、妙な顔をしていたが、やがてノツソリと湯から出て来て、小便を仕舞しまつたばかりの娘の首すじを掴むと、その膨れた腹をグツと押えつけた。

「これは何じゃえ」

「あたしの腹じゃがな」

と娘は顔を上げてニコニコと笑った。クスクスという笑い声が又、そこここから起った。

「それはわかつとる……けんどナ……この膨れとるの
は何じゃエ……これは……」

「知らんがな……あたしは……」

「知らんちうことがあるものか……いつから膨れたの
じゃエこの腹はコンゲニ……今夜初めて気が付いたが
……」

と親爺は物凄い顔をしてラムプをふりかえった。

「知らんがナ……」

「知らんちうて……お前だれかと寝やせんかな。おれがようた用達しに行つとる留守の間に……エエコレ……」

「知らんがナ……」

と云い云いふり仰ぐお八重の笑顔は、女神のように美しく無邪気であつた。

親爺は困惑した顔になつた。そこいらをオドオド見まわしては新らしいラムプの光りと、娘の膨れた腹とを、さも恨めしげに何なん遍も何べん遍も見比べた。

「オラ知つとる……」 「ヒツヒツヒツヒツ」

という小さな笑い声はその時に入口の方から聞えた。その声が耳に這入ったかして、元五郎親爺はサツと血相をかえた。素裸体のまま曲つた足を突張つて、一足飛びいっそくに入口の近くまで来た。それと同時に、「ワ——ッ」「逃げろッ」

という声が一時に浴場のまわりから起つて、ガヤガヤガヤと笑いながら、八方に散つた。そのあとから薪割用の古鉈ふるなたを提ひっさげた元五郎親爺が、跛びっこ引き引き駆け出したが、これも森の中の闇に吸い込まれて、足音一つ

聞こえなくなつた。

その翌あぐる朝の事。元五郎親爺は素裸体に、鉈をしつかりと搦んだままの死体になつて、鎮守さまのうしろの井戸から引き上げられた。又娘のお八重は、そんな騒ぎをちつとも知らずに廃屋あぼらやの台所の板張りの上でグーグー睡つていたが、親爺の死体が担ぎ込まれても起き上る力も無いようす……そのうちにそこいらが變に臭いので、よく調べてみると、お八重は叱るものが居なくなつたせいだ、昨夜ゆうべの残りの冷飯ひやめしの全部と、糠ぬか味噌みその中の大根や菜なつ葉ばを、糠ぬかだらけのまま残らず

平らげたために、烈しい下痢を起して、腰を抜かしていることがわかった。

そのうちに警察から人が来て色々と取調べの結果、昨夜ゆうべからの事が判明したので、元五郎親爺の死因は過失のうしんどうから来た急劇脳震盪のうしんどうということに決定したが、一方にお八重の胎児の父はどうしてもわからなかった。

初めはみんな、撃剣を使いに行く青年たちのイタズラであろうと疑っていたが、八釜やかまし屋やの区長さんが主任しんみたようになって、一々青年を呼びつけて手厳しく調べてみると、この村の青年ばかりでなく、近所の

村々からもお八重をヒヤカシに来ていた者があるらしい。それでお八重には郵便局という綽名あだながついていることまで判明したので、区長さんは開いた口が塞ふさがらなくなつた。

すると、その区長さんの長男で医科大学に行つていゝる駒吉というのが、ちようどその時に帰省していて、この話をきくと恐ろしく同情してしまつた。実地経験にもなるというので、すぐに学生服を着て、お八重の居る廃屋へやつて来て、新しい聴診器をふりまわしながら親切に世話をし初めた。母親に頼んで三度三度お

粥かゆを運ばせたり、自身に下痢止めの薬を買って来て飲ませたりしたので「サテは駒吉さんの種であつたか」という噂がパツと立つた。しかし駒吉はそんな事を耳にもかけずに、休暇中毎日のようにやって来て診察している、今度はその駒吉が、お八重の裸体の写真を何枚も撮つて、机の曳出ひきだしに入れていることが、誰云うとなく評判になつたので、流石さすがの駒吉も閉口したらしく、休暇もそこそこに大学に逃げ返つた。そうすると又、あとからこの事をきいた区長さんがカンカンに怒り出して、母親がお八重の処へ出入りするのを嚴重

にさし止めてしまった。

「お八重が子供を生みかけて死んでいる」という通知が、村長と、区長と、駐在巡査の家へ同時うちに来たのは、それから二三日経つての事であつた。それは鎮守の森一パイに蟬の声の大波が打ち初めた朝の間まの事であつたが、その森蔭の廃屋へ馳けつけた人は皆、お八重の姿が別人のように變つていたのに驚いた。誰も喰い物を与えなかつたせいか、美しかつた肉付きがスツカリ落ちこけて、骸骨のようになって仰臥ぎやうがしていたが、死んだ赤子の片足を半分ばかり生み出したまま、苦悶し

いしい絶息したらしく、両手の爪をボロ畳に掘り立て、全身を反り橋そのように硬直させていた。その中うちでも取りわけて恐ろしかったのは、蓬々ぼうぼうと乱れかかった髪の毛かみのけの中から、真白くクワツと見開いていた両眼であつたという。

「お八重の婿どん誰かいナア

あほうがらす 阿呆鴉ふくろか梟かア

お宮の森のくら闇で

ホ——イホ——イと啼ないている。

ホイ、ホイ、ホ——イヨ——」

という子守唄が今でもそこいらの村々で唄われている。

赤玉

「ナニ……兼吉かねきちが貴様を毒殺しようとした？……」

と巡査部長が眼を光らすと、その前に突立つた坑夫こうふてい体の男が、両手を縛られたまま、うなだれていた顔をキツもたと擡たげた。

「へエ……そんなで……兼吉をやっつけましたので……」

と吐き出すように云つて、眼の前の机の上に、新聞紙を敷いて横たえてある鶴つる嘴はしを睨みつけた。その尖端

の一方に、まだ生々しい血の塊かたまりが粘りついている。巡査部長は意外という面おももちで、威儀を正すかのよううに坐り直した。

「フーム。それはどうして……何で毒殺しようとしたんか……」

「へエそれはこうなので……」

と坑夫体の男は唾を呑み込みながら、入口のタタキの上に、筵むしろを着せて横たえてある被害者の死骸をかえりみた。

「私が一昨日おとつから風邪を引きまして、納屋なやに寝残って

おりますと、昨日きのうの晩方の事です。あの兼かねの野郎が仕事を早仕舞はやじまいにして帰つて来て『工合はどうだ』と訊ききました」

「……ふうん……そんなら兼と貴様は、モトから仲が悪かつたという訳じゃないな」

「……へエ……そうなんで……ところで旦那……これはもう破れカブレでぶちまけますが、大体あの兼の野郎と私との間には六百ケンで十両ばかりのイキサツがありますので……尤もつとも私が彼奴あいつに十両貸したのか……向うから私が十両借りたのか……そこんところが、あ

んまり古い話なので忘れてしまいました……チツポケ
ナ金ですから、どうしても構わんと思つていても、兼の
顔さえ見ると、奇妙にその事が気にかかつてしようが
なくなりますので……けんどそのうちに兼が何とか
云つて来たらどつちが借りたか、わかるだろうと思つ
て黙つていたんですが……そんで……私は見舞いを云
いに来た兼の顔を見ると又、その事を思い出しました。
そうして……どうも熱が出たようで苦しくて仕様がな
い。こんな事は生れて初めてだから、事に依ると俺は
死ぬんかもしれない……と云いますと兼の野郎が……

そんだったら俺が医者を呼んで来てやろうと云つて出て行きました。待つても待つても帰つて来ません。私は兼の野郎が唾を引っかけて行きおつたに違いないと思つてムカムカしておりましたが、そのうちに十二時の汽笛が鳴りますと、どこかで喰らつて真赤になつた兼が、雨にズブ濡れぬになつて帰つて来て私の枕元にドンと坐ると、大声でわめきました。何でも……事務所の医者（炭坑医）は二三日前から女郎買いに失せおつて、事務所を開けてケツカル……今度出会つたら向う脛をぶち折つてくれる……といふので……」

「……フム……不都合だなそれは……」

「……ネエ旦那……あいつらア矢つ張り洋服を着たケダモノなんで……」

「ウムウム。それから兼はどうした」

「それから山の向うの村の医者ン所へ行つたら、此奴こいつも朝から鰻取りうなぎに出かけて……」

「ナニ鰻取り……」

「へエ。そうなんで……この頃は毎日毎日鰻取りにかかり切りで、家うちには滅多にうせおらんそうで……よくきいてみるとその医者は、本職よりも鰻取りの方が名

人なんで……」

「ブツ……馬鹿な……余計な事を喋舌しゃべるな」

「へエ……でも兼の野郎がそう吐ぬかしましたので……」
「フーム。ナルホド。それからどうした」

「それから兼は、その村の荒物屋を探し出して、風邪引きの妙薬はないかちうて聞きますと……この頃風邪引きが大バヤリで売り切れてしまったが、馬の熱さましあかだまで赤玉ちうのならある。馬の熱が取れる位なら人間の熱にも利くだろうが……とその荒物屋の親仁おやしが云うので買って来た……しかし畜生は薬がよく利くから、分

量が少くてよいという事を俺はきいている。だから人間は余計に服のまなければ利くまいと思つて、その赤玉ちうのを二つ買つて来た。これを一時いちどきに服んだら大抵利くだろう。金は要らぬから、とにかく服んで見イ……と云ううちに兼は白湯さゆを汲んで来て、薬の袋と一緒に私の枕元へ並べました。私は兼の親切に涙がこぼれました。このアンバイでは俺が兼に十円借りていたに違いないと思ひ思ひ薬の袋を破つてみますと、赤玉だというのに青い黴かびが一パイに生えておりました、さし渡しが一寸近くもありましたろうか……それを一ツ

宛、白湯で丸呑みにしたんですがトテも骨が折れて、息が詰まりそうで、汗をビツシヨリかいてしまいました」

「……フーム。それで風邪は治ったか」

「へエ……今朝けさになりますと、まだ些すこしフラフラしますが、熱は取れたようですから、景気づけに一パイやっておりますところへ、昨日きのう、兼からの言伝ことづてをきいたと云つて、鰻取りの医者が自転車でやって来ました。五十位の汚いオヤジでしたが、そいつを見ると私は無性に腹が立ちましたので……この泥掘り野郎……貴様

みたいな藪医者に用は無はい。憚はばりながら俺の腹の中
は、赤玉が二つ納まつているんだぞ……と怒鳴りつけ
てやりましたら、その医者は青くなつて逃げ出すかと
思ほいの外……ジーツと私の顔を見て動こうとしませ
ん」

「フーム。それは又何故なか」

「その爺じいは暫く私の顔を見ておりましたが……それ
じゃあお前は、その二ツの赤玉を、いつ飲んだんか
……と云ううちにブルブル震え出した様子なので、私
も気味が悪くなりました……ナニ赤玉には違ちがいないが、

青い黴の生えた奴を、昨夜十二時過に白湯で呑んだんだ。そのおかげで今朝はこの通り熱がとれたんだが、それがどうしたんか……とききますと医者（ちい）の爺はホツとしたようすで……それは運が強かった。青い黴が生えていたんで、薬の利き目が弱っていたに違いない。あの赤玉の一粒に使つてある熱さましは、人間に使う分量の何層倍にも当るのだから、もし本当に利いたら心臓がシビレて死んで終（しま）う筈だ……どつちにしても今酒を呑むのはケンノンだから止めると云つて、私の手を押えました」

「フーム。そんなもんかな」

「この話をきくと私は、すぐに納屋を出まして坑まぶへ降りて、仕事をしている兼を探し出して、うしろから脳天を喰らわしてやりました。そうして旦那の処へ御厄介を願いに来ましたので……逃げも隠れも致しません。へエ……」

「フーム。しかしわからんナ。どうも……その兼をやっつけた理由が……」

「わかりませんか旦那……兼の野郎は私が病気にしているのにつけ込んで、私を毒殺して、十両ゴマ化しようと

したに違いないのですぞ。あいつはもとから物識りものしな
のですからね。ネエ旦那そうでしょう、一ツ考えてお
くんないさい」

「ウツプ……たつたそれだけの理由か」

「それだけって旦那……これだけでも沢山じやありま
せんか」

「……バ……馬鹿だナア貴様は……それじや貴様が、
兼に十両貸したのは、間違いない事実だと云うんだ
ナ」

「へエ。ソレに違いないと思うので……そればかり

ではありません。兼の野郎が私を馬と間違えたと思う
と矢鱈やたらに腹が立ちましたので……」

「アハハハハ……イヨイヨ馬鹿だナ貴様は……」

「へエ……でも私は恥を搔かかされると承知出来ない性
分で……」

「ウーン。それはそうかも知れんが……しかし、それ
にしても貴様の云うことは、ちつとも訳が解らんじや
ないか」

「何故ですか……旦那……」

「何故というて考えてみる。兼のそぶりで金の貸し借

りを判断するちう事からして間違っているし……」

「間違っております……あいつは……ワ……私を毒殺しようとしたんです……旦那の方が無理です」

「黙れッ……」

と巡査部長は不意に眼を怒らして大喝した。坑夫の云い草が機嫌に触さわつたらしく、真赤になつて青筋を立てた。

「黙れ……不埒ふらちな奴だ。第一貴様はその証拠に、その薬で風邪が治つとるじやないか」

「へエ……」

と坑夫は毒気を抜かれたように口をポカンと開いた。そこいらを見まわしながら眼を白黒さしていたが、やがてグツタリとうなだれると床の上にペタリと坐り込んだ。涙をポトポト落してひれ伏した。

「……兼……濟まない事をした……旦那……私を死刑にして下さい」

古鍋

「金貸し後家ごけ」と言えは界限で知らぬ者は無い……五
十前後の筋骨逞ましい、二夕目ふと見られぬ黒アバタで
……腕じょうずつ節なら男よりも強い強慾者で……三味線が
上手で声が美しいという……それが一人娘のお加代と
いうのと、たった二人切りで、家倉いえくらの立ち並んだ大き
な家に住んでいた。しかし娘のお加代というのは死ん
だ親爺おやじ似かして、母親とは正反対の優しい物ごしで、

色が幽霊のように白くて、縫物が上手という評判であつた。

そのお加代のところへ、隣り村の畳屋の次男坊で、中学まで行つた勇作というのが、この頃毎晩のように通つて来るといふので、兼ねてからお加代に思いをかけていた村の青年たちが非常に憤慨して、寄り寄り相談を初めた。そのあげく五月雨さみだれの降る或る夕方のこと、手に手に棒千切ぼうちぎりを持った十四五人が「金貸し後家うち」の家のまわりを取り囲むと、強がりの青年が三人代表となつて中に這入はいつて、後家さんに直接談判を開始した。

「今夜この家に、隣り村の勇作が這入つたのを慥たしかに見届けた。尋常に引渡せばよし、あいまいな事を云うなら踏み込んで家探しをするぞ……」

という風に……。

奥から出て来た後家さんは、浴衣ゆかたを両方の肩へまくり上げて、黒光りする右の手でランプを……左手に団扇うちわを持っていたが、上あがりかまち框かまちに仁王立ちに突立つたまま、平氣の平左で三人の青年を見下した。

「アイヨ……来ていることは間違いないよ……だけんど……それを引渡せばどうなるんだえ」

「半殺しにして仕舞うのだ。この村の娘には、ほかの村の奴の指一本指させないのが、昔からの仕来りだ。お前さんも知っているだろう」

「アイヨ……知っているよ。それ位の事は……ホホホホホ。けれどそれはホントにお生憎あいにくだったネエ。そんな用なら黙ってお帰り！」

「ナニツ……何だと……」

「何でもないよ、勇作さんは私の娘の処へ通っているのじゃないよ」

「嘘を吐け。それでなくて何で毎晩この家うちに……」

「へへへへへへ。妾わたしが用があるから呼びつけているのさ……」

「エッ……お前さんが……」

「そうだよ。へへへへへへ。大事な用があつてね……」

「……そ……その用事というのは……」

「それは云うに云われぬ用事だよ……けんど……いずれそのうちにはわかる事だよ……へッへッへッへッ」

青年たちは顔を見合わせた。白い歯を剥むき出してニタニタ笑っているアバタ面づらを見ているうちに、皆気味がわるくなつたらしかつたが、やがてその中の一人が

勿体らしく、咳払いをした。

「……ようし……わかつた……そんなら今夜は勘弁してやる。しかし約束を違えると承知しないぞ」

という、へんてこ変挺な捨科白すてぜりふを残しながら三人は、無理に肩そびやかを聳して出て行つた。

勇作はそれから後、のち公々然とこの家に入浸りになつた。

ところが、やがて五六ヶ月経つて秋の収穫期とりいれどきになると、後家さんの下ツ腹が約束の通りにムクムクとセリ出して来たのでドエライ評判になつた。どこの稲扱いねこき

場ばでもこの噂で持ち切った。しかもその評判が最高度ぜつちように達した頃に村役場へ「勇作を娘の婿養子にする」という正式の届出とどけが後家さんの手で差し出されたので、その評判は一層、輪に輪をかけることになった。

「これはどうもこの村の風儀上面白くない」と小学校の校長さんが抗議を申込んだために、村長さんがその届を握り潰している……とか……村の青年が近いうちに暴れ込む手筈になっている……とか……町の警察でも内々で事実を調べにかかっている……とかいう穿うがつた噂まで立ったが、そのせい「金持ち後家」の一家三

人は、裏表の戸をピツタリと閉め切つて、醤油買いにも油買いにも出なくなつた。いつもだと後家さんは、収穫後の金取り立てとりいれごで忙しいのであつたが、今年はそんなもようがないので、借りのある連中は皆喜んだ。

ところが又そのうちに、収穫とりいれが一通り済んで、村中がお祭り気分になると、後家さんの家うちがいつまでも閉め込んだ切り、煙一つ立てない事にみんな気が付き初めた。初めのうちは「後家さんが、どこかへ子供を生まに行つたんだらう」なぞと暢気のんきなことを云つていたが、あんまり様子が変わるので、とうとう駐在所の旦那

がやつて来て、区長さんと立ち合いの上で、裏口の南
京錠をコジ離して這入つてみると、中には人ツ子一人
居ない。そうして家具家財はチャンとしているよう
であるが、その中で唯一つ金庫の蓋が開あいて、現金と通
い帳が無くなつていようす……その前に男文字の手
紙が一通、読みさしそのまま放り出してあるのを取り上
げて読んでみると、あらかたこんな意味の事が書いて
あつた。

「お母さん。あなたがあの時に、勇作さんを助けて
下すつた御恩は忘れません。けれども、それから後のち

の、あなたの勇作さんに対する、恩着せがましい横暴な仕うちは、いくら恨んでも恨み切れません。妾わたしはもう我慢出来なくなりましたから、勇作さんと一緒に、どこか遠い所へ行つてスウィートホームを作ります。私たちは当然私たちのものになっている財産の一部を持って行きます。さようなら。どうぞ幸福に暮して下さい。

月 日

勇作

妻加代

母上様

それでは後家さんはどこへ行つたのだらうと、家中を探しまわると、物置の梁はりから、半腐りの縊い死した体たいとなつてブラ下つているのが発見された。その足下にはボロ切れに包んだ古鍋が投げ棄ててあつた。

模範兵士

御維新後、煉瓦れんが焼きが流行はやつた際に、村から半道ばかり上かみの川添いの赤土山を、村の名主どんが半分ばかり切り取って売ってしまった。そのあとの雑木林の中から清水が湧くのを中心にして、いつからともなく乞食の部落が出来ているのを、村の者は単に川上川上と呼んでいた。

部落といつても、見すばらしい蒲鉾かまぼこ小舎こやが、四ツ五

ツ固まっっているきりであつたが、それでも郵便や為替かわせも来るし、越中富山の薬売りも立ち寄る。それに又この頃は、日ごとに軍服いか厳めしい兵隊さんが帰省して来るといふので、急に村の注意を惹き出した。何でも立派な身分の人の成なれの果はてが隠れているらしいといふ噂であつた。

その兵隊さんといふのは、郵便局員の話によると西村さんといふので、眼鼻立ちのパツチリした、活動役者のように優しい青年であるが、この部落の仲間では新米らしく、すこし離れた所に蒲鉾小舎を作つて、そ

の中に床に就いたままの女を一人かく匿まつている。その女の顔はよくわからないが年の頃は四十ばかりで、気味の悪いほど色の白い上品な顔で、西村さんがお土産みやげをさし出すと、両手を合わせて泣きながら受け取っているのを見た……と……これは村の子守こもりたちの話であつた。

それから後のち西村さんの評判は、だんだん高くなるばかりであつた。その女は西村さんの何であろうか……と噂が取り取りであつたが、そのうちに、村でたった一軒だけ荒物屋に配達されている新聞に、西村さんの

事が大きく写真入りで出た。

——西村二等卒は元来、東北の財産家の一人息子であつたが、十三の年に父親が死ぬと間もなく一家が分散したので、母親に連れられて長崎の親類の処へ行くうちに、あわれや乞食にまで零落して終つた^{しま}。それから七年の間、方々を流浪していると、昨年の春から母親が癆症^{ろうしやう}で、腰が抜けたので、とうとうこの川上の部落に落ちつく事になつたが、丁度その時が適齢だったので、呼び出されて検査を受けると、美事に甲種で合格した。しかし西村二等卒は入営し

ても決して贅沢をしなかつた。給料を一文も費つかわな
いばかりか、宮庭の掃除の時に見付けた尾錠びじょうや釦ボタンを
拾い溜めては、そんなものをなくして困っている同
僚に一個一錢宛ずつで売りつけて貯金をする。そうして
日曜日を待ちかねて、母親を慰めに行くことが聯隊
中の評判になつたので、遂に聯隊長から表彰された。
性質は極めて柔順温良で、勤務勉励、品行方正、成
績優等……曰いわく何……曰く何……。

西村さんの評判はそれ以来絶頂に達した。日曜にな
ると村の子守女が、吾われも吾もと出かけて、川上の部落

を取り巻いて、西村さんの親孝行振りを見物した。西村さんが病人の汚れものと、自分のシャツを一緒にして、朝霜の大川で洗濯するのを眺めながら「あたし西村さんの処へお嫁に行つて上げたい」「ホンニナア」と涙ぐむ者さえあつた。

そのうちに新聞社や、聯隊へ宛ててドシドシ同情金が送りつけて来たが、中には女の名前で、大枚「金五十円也」を寄贈するものが出来たりしたので、西村さんは急に金持ちになつたらしく、同じ部落の者の世話で、母親の寝ている蒲鉾小舎を、家らしい形の亜鉛板張り

「親孝行チウはすべきもんやナア」

と村の人々は歎息し合つた。

ところが間もなく大変な事が起つた。

ちようど桜がチラチラし初めて、麦畑を雲雀ひばりがチヨ

ロチヨロして、トテモいい日曜の朝のこと。カーキ

色の軍服を、平生いつもよりシヤンと着た西村さんが、それ

こそ本当に活動女優ソツクリの、ステキなハイカラ

美人さんと一緒に自動車に乗って、川上の部落へやって来

たのであつた。

もつと

尤もこの日に限つて西村さんは、何となく気が進まぬらしい態度で、自動車から降りると、泣き出しそうな青い顔をして尻込みをしているのを、ハイカラ美人が無理に手を引っぱつて、トタン亜鉛張りの家うちに這入つたが、母親はまだ睡つていたらしく、二人とも直ぐに外へ出て来た。

それから西村さんは直ぐに帰ろうとして自動車の方へ行きかけたけれども、ハイカラサンが無理やりに引き止めた。そうして自動車の中から赤い毛布を一枚と、

美味うまそうなものを一パイ詰めた籠を出して、雑木林の

中の空地に敷き並べると、部落に残っている片輪かたわ連中を五六人呼び集めて、奇妙キテさかもりツな酒宴を初めた。

まず、最初は三々九度の真似事らしく、顔を真赤にして羞はにか恥んでいる西村さんと、キヤアキヤア笑っているハイカラ美人さんが、呆あっけ気を取られている片輪たちの前で、赤い盃を遣ったり取ったり、押し戴いたりしていたが、間もなく外ほかの連中も、白い盃や茶呑茶碗でガブガブとお酒を呑み初めた。その御馳走の中には、ネジパンや、西洋のお酒らしい細長い瓶や、ネーブル蜜柑

などがあつたが、その他は誰一人見たことも聞いたこともないかんづめ鐘詰みたようなものばかりを、寄つてたかつていしお美味そうにパクついていた。

西村さんもハイカラ美人さんにお酌をされて恥かしそうに飲んでいたが、その中うちにハイカラ美人さんはスツカリ酔つ払つてしまつたらしく、毛布の上に立ち上つて何かしらペラペラと、演説みたような事をしやべ饒舌り初めた。それから赤い湯もじをお臍の上までマクリ上げると、大きな真白いお尻を振り立てて、妙テケレンな踊りをおどり出した。それを片輪連中が手をたたいて賞めて

……までは、よつぽど面白かったが、間もなく横のトタン葺ぶきの小舎から、幽霊のように痩せ細った西村さんのお母さんが、白い湯もじ一貫のまま、ヒヨロヒヨロと出て来た姿を見ると、みんな震え上がってしまった。

青白い糸のような身体からだに、髪毛かみのけをバラバラとふり乱して、眼の玉を真白に剥むき出して、歯をギリギリと噛んで、まるで般若はんにやのようにスゴイ顔つきであつたが、慌てて抱き止めようとする西村さんを突き飛ばすと、

踊りを止めてボンヤリ突立っているハイカラ美人さんに、ヨロヨロとよろめきかかった。そのままシツカリと抱き付いて、眼の玉をギョロギョロさせながら、口を耳までアーンと開あいて喰い付こうとした。それを西村さんが一生懸命に引き離して、ハイカラ美人さんの手を取りながら、自動車に乗ってドンドン逃げて行つた。あとにはお母つかさんが片息になつて倒れているのを、皆みんなで介抱しているようであつたが、離れた処から見えていた上に、言葉が普通あたりまえと違つているので、どんな経緯いきさつなのかサツパリわからなかつた……という子守女こもりたちの報告

「フーン。それは、わかり切つとるじゃないか」

と、聞いていた荒物屋の隠居は、新聞片手に子守女たちを見まわした。

「西村さんのお母つかさんが、そんな女は嫁にすることはならんと云うて、止めたまでの事じゃがナ」

子守女こもりたちは、みんな妙な顔をした。何だかわかつたような、わからぬようなアンバイで、張り合い抜けがしたように、荒物屋の店先から散つて行つた。

ところが又、その翌る日の正午頃ひるになると、村の駐在せんせいと、部長さんらしい金モールを巻いた人を先に立てて、村の村医せんせいと腰にピストルをつけた憲兵との四人が、めいめいに自転車のベルの音をケタタマシク立てながら村を通り抜けて、川上の方へ行つたので、通り筋の者は皆、何事かと思つて、表へ飛び出して見送つた。その中から一人行き、二人駆け出しして行つたので、川上の部落のまわりは黒山のような人だかりになつたが、そんな連中が帰つて来てからの話によると、事件というのは西村のお母つかさんが昨夜ゆうべのうちに首

を縊くつたので、昨日きのうのハイカラ美人さかんが殺したのじやないかと、疑いがかかっているらしい……というのであつた。

しかし、それにしても様子がおかしいといふので、評議ぎが区々まちまちになつてはいたが、あくる朝を待ちかねて人々が、荒物屋に集まってみると、果して、事件の真相が詳しく新聞に出ていた。「模範兵士の化けの皮」という大きな標題みだしで……

……西村二等卒の性行を調査の結果、表面温順に見える一種の白痴で、且かつ、甚こだしい変態性慾の耽溺

者であることがわかった。すなわち、その母親として仕えていたのは、実は子供の時から可愛がられていた情婦に過ぎないのであつたが、最近に至つて有名な箱師はこしのお玉という、これも変態的な素質を持つた毒婦が、模範兵士の新聞記事を見て、大胆にも原籍本名を明記した封筒に、長々しい感激の手紙と、五拾円也の為替を入れて聯隊長宛に送つて来た。これを本紙の記事によつて知つた警察当局では、極秘裡に彼女の所在を厳探中げんたんちゆうであつたが、あくまでも大胆不敵なお玉は、その中を潜つて西村と関係を結ん

だらしく、すっかり西村を丸め込んでしまった揚句、あげく
二人で自動車に同乗して、贗にせの母親を嘲弄ちやうろうしに行つたのが一昨日曜の午前中の事であつたという。ところが西村はそのまま、隊へは帰らずに、駅前の旅館で服装を改めて、お玉と一緒に逃亡した模様である。一方に西村の贗にせ母親は、憤慨の余り縊死いししていることが昨朝に至つて発見されたので、早速係官が出張して取調とりしらべの結果、他殺の疑いは無いことになつた。しかし、同時に、附近の乞食連中の言に依つて、この種の変態的關係は、彼等仲間の通有的茶飯事で、

決して珍らしい事ではないと判明したので、係官も苦笑に堪えず……云々……。

「……ところでこの、ヘンタイ、セイヨクの、何とかチウのは、何じやろか……」

「おらにもわからんがナ」

と荒物屋の隠居は、大勢に取り巻かれながら、投げ出すように云った。

「近頃の新聞はチットでも訳のわからんことがあると、すぐに、ヘンタイ何とかチウて書きおるでナ。おらが思うに西村さんは、やっぱり親孝行者じやったのよ。」

それが性の悪い女に欺だまされて、大病人の母親を見すたので、義理も恩もしらぬ近所隣りの乞食めらが、あとの世話を面倒がつて、何とかかとかケチをつけて、無理往生に首を縊らせたのじゃないかと思うがナ……ドウジャエ……」

皆一時にシンとなつた。

兄貴の骨

「お前の家の、一番西に当る軒先から、三尺離れた処を、誰にも知らせぬようにして掘つて見よ。何尺下かわからぬが、石が一個埋もつてひとつづついる筈じゃ。その石を大切に祭れば、お前の女房の血の道は一ひと月経たぬうちに癒る。一年のうちには子供も出来る。二人ともまだ若いのじゃから……エーカナ……」

と若い文作はひれ伏した。その向うには何でも適中あたるといふ評判の足菱なえ和尚おしょうさんが、丸々と肥かつた身体からだに、浴衣がけの大胡座おおあぐらで筮竹ぜいちくを斜しやに構かえて、大きな眼玉たまを剥むいていた。

その座布団の前に文作は、五十錢玉を一つ入れた状袋じょうぶくろを、恐る恐る差し出して又ひれ伏した。するとその頭の上から、和尚の胴間声どうまごえが雷かみなりのように響ひびいて来た。

「しかし、早はやうせんと、病人びやうじんの生命いのちが無ないぞ……」

「へーッ……」

と文作は今一度畳の上に額かぶたをすりつけると、フラフ

ラになつたような気もちで方丈ほうじょうを出た。途中で寒さ凌しのぎに一パイ飲んで、夕方になつて、やつと自宅うちへ帰りついた文作は着のみ着のまま、物も云わずに、蒲団を冠つて寝てしまった。難産のあとの血の道で、お医者に見放されてブラブラしている女房が心配して、どうしたのかと、いろいろに聞いても返事もせずグーグーいびきをかいていたが、やがて夜中過ぎになると文作は、女房の寝息を窺いながらソーツと起き上つて、裏口から、西側の軒下にまわつた。そこに積んであつた薪を片づけて、分捕りスコップほらいさげひん（日露戦役戦利払下品）

を取り上げると、氷のような満月の光を便りに、物音を忍ばせてセッセと掘り初めたが、鍬くわと違つて骨が折れるばかりでなく、土が馬鹿に固くて、三尺ばかり掘り下げらるうちに二の腕がシビレて来たので、文作はホッと一息して腰を伸ばした。

するとその時に、今まで気がつかなかったが、最初に掘り返した下積みの土の端つこに、何やら白いものが二ツ三ツコロコロと混っているのが見えた。文作はそれを、何の気もなく月あかりにつま抓み出しながら、泥を払い落してみると、それは魚よりすこし大きい位の

背骨の一部だったので、文作は身体中の血が一時に凍ったようにドキンとした。ワナワナと慄え出しながら、切れるように冷たい土を両手で掻き払って、丹念に探しまわってみると、泥まみれになつてはいるが、脊椎骨らしいものが七八ツと、手足の骨かと思われるものが二三本と、わけのわからない平べつたい、三角形の骨が二枚と、一番おしまい、黒い粘つこい泥が一パイに詰まつた、頭蓋骨らしいものが一個出た。

文作は、もうすこしで大声をあげるところであつたが、女房が寝ていることを思い出してやつと我慢した。

身体中がガタガタと慄ふるえて、頭が物に取り憑つかれたようにガンガンと痛み出した。横路地から這うようにして往来に出ると、一目散に馳け出した。

文作が足萎え和尚の寝ている方丈の雨戸をたたいた時には、もう夜が明けはなれていたが、和尚が蹙いざりながら雨戸を開けて「何事か」と声をかけると、文作は「ウーン」と云うなり霜の降ったお庭へ引っくり返つてしまった。

それをやがて起きて来た梵妻だいくや寺男が介抱をしてやると、やっと正氣づいたので、手足の泥を洗わせて方

丈へ連れ込んだのであつたが、熱い湯を飲ませて落ちつかせながら、詳しく事情を聞き取るうちに、和尚はニヤリニヤリと笑い出して、何度も何度も首肯うなずいた。

「ウーム。そうじやろう……そうじやろうと思つた。

実はナ……埋うずまつているのが人間の骨じやと云うと、臆病者のお前が、よう掘るまいと思つたから石じやと云うておいたのじやが、その骨というのはナ……エエか……ほかならぬ、お前の兄貴の骨じやぞ……」

「ゲーツ。私の兄貴の……」

「……と云うてもわかるまいが……これには深い仔細わけ

があるのじゃ」

「へエツ。どんな仔細で……」

「まあ急せぎ込まずとよう聞け。……ところでまず、その前に聞くが、お前は昨日きのう来た時に両親はもう居らんと云うたノ」

「へエ。一昨年おとしの大虎列刺コレラの時に死にましたので……」

「ウンウン。それじゃから云うて聞かすが、お前の母親かかさんというのは、ああ見えても若いうちはナカナカ男好きじゃつたのでナ。ちようどお前の処に嫁入る半年ばかり前に、拙僧わしの処へコツソリと相談に来おつてナ

……こう云うのじゃ。わたしはこの間の盆踊りの晩に、誰とも知れぬ男の胤たねを宿したが、まだ誰にも云わずにいるうちに、文太郎さんが養子に来ることになりました。わたしも文太郎さんなら固い人じゃけに、一緒になつてもええと思うけれど、お腹なかの子があつてはどうにもならぬ故ゆえ、どうか一ツ御祈祷をして下さらんかという是非ない頼みじゃ。そこで拙僧わしは望み通りに、真言秘密の御祈祷をしてやって、出て来た孩児ややくはこれこれの処に埋めなさい……とまで指図をしておいたが……それがソレ……その骨じゃ。エエカナ……ところ

が、それから二十年余り経つた昨日の事、お前がやつて来てからの頼みで、卦けを立ててみると……どうじゃ……その盆踊りの晩に、お前の母親かかさんの腹に宿つたタネ……というのは、お前の父親てておや……すなわち文太郎のタネに相違ないという本文ほんもんが出たのじゃ。つまりその、墮胎おろされた孩児ややこというのは、取りも直さずお前の兄さんで、お前の代りに家倉いえくらを貰う身柄であつたのを、闇から闇に落されたわけで、多分この事はお前の両親も知つていたろうと思われる証拠には……ソレ……その孩児ややこを埋めた土の上がわざつと薪置場たきぎにしてあつたじやろ

う。けれども、その兄貴の怨みはきょうまでも消えず、お前の家の跡を絶やすつもりで、お前の女房に祟っているのです……出て来たものを丁寧に祭れと云うたのはここの事ジャ……エーカナ。本当を云うと、これはお前の母親の過失で、お前や、お前の女房が祟られる筋合いの無いのじやが、そこが人間凡夫の浅ましきでナ……」

という風に和尚は、引き続いて長々とした説教を始めた。

文作は青くなったり、赤くなったりして、首肯首肯うなずきうなずき

聞いていたが、そのうちに立つても居てもいらぬよ
うにソワソワし始めた。和尚の志の茶づけを二三杯、
大急ぎで掻き込むとそのまま、霜解どけの道を走つて
帰った。

ところが帰つて来て見ると、文作が心配していた以
上の大騒ぎになっていた。

文作が昨日のうちに、軒下から孩や児やこの骨を掘り出し
たまま、どこかへ逃げてしまっている。女房はそれを
聞くと一ペンに血が上がって、医せん師せいが間に合わぬうち

に齒を喰い締めて息を引き取った……といふので文作の家の中^{うち}には、村の女房達がワイワイと詰めかけている。家の外^{うち}には老人や青年が真黒に集まつて、泥だらけの白骨を中心に、大評議をしている……といふわけだ……そこへ文作が帰つて来たのであつたが、女房の死骸を一眼見ると、文作は青い顔をしたまま物をも云わず外へ飛び出して、村の人々を押しわけて、白骨の置いてある土盛りの処へ来た。ジイツと泥だらけの白骨を見ていたがイキナリその上に突伏して、

「兄貴……ヒドイ事をしてくれたなア……」

と大声をあげて泣き出した。

人々は文作が発狂したのかと思つた。けれども、そのうちに、駐在所の旦那や区長さんが来て、顔中泥だらけにして泣いている文作を引きずり起こすと、文作は土の上に坐つたまま、シヤクリ上げシヤクリ上げして一伍一什いちぶしじゅうを話し出した。

聞いていた人々は皆眼を丸くして呆あきれた。顔を見交して震え上つた。うしろから取り巻いて耳を立てていた女たちうちの中には、気持ちが変わるくなつたと云つて水を飲みに行つたものもあつた。

それから間もなく件の白骨は、キレイに洗い浄められて、古綿を詰めたボールの菓子箱に納まって、文作の家の仏壇に、女房の位牌と並べて飾られた。評判に釣られて見に来る人が多いので、文作の女房の葬式は近頃にない大勢の見送りであつた。

ところが事件はこれで済まなかつた。どうも話がおかしいというので、駐在所の旦那が色々と取調べたあげく、一週間ばかりしてから郡の医師会長の学士さんに来てもらつて、件の白骨を見てもらうと、犬の骨に間違いない……という鑑定だったので又も大評判に

なつた。その結果、あくまでも人間の胎児の骨だと云い張つた足^{あしな}萎え和尚は、拘留処分を受けることになつたが、しかし村の者の大部分は学士さんの鑑定を信じなかつた。文作の話をどこまでも本当にして、云い伝え聞き伝えしたので、足^{あしな}萎え和尚を信仰するものが、前よりもズツと殖^ふえるようになった。

文作もその後久しく独身でいるが、誰も恐ろしがつて嫁に来るものが無い。

X光線

電車会社の大きなベースボールグラウンドが、村外むらはずの松原を切り開いて出来た。その開場式を兼ねた第一回の野球試合の入場券が村中に配られた。おまけにその救護班の主任が、その村の村医で、郡医師会の中うちでも一番古参の人格者と呼ばれている、松浦先生に当つたといふので、村中の評判は大したものであつた。本物のベースボールといふものは、戦争みたように恐

ろしいもので時々怪我人が出来る。救護班というのは、その怪我人を介抱する赤十字みたようなものだ……なぞと真顔になつて説明するものさえあつた。

当の本人の松浦先生も、むろんステキに意気込んでいた。当日の朝になると、まだ暗いうちに一帳羅のフロックコートを着て、金鎖を胸高にかけて、玄関口に寄せかけた新調の自転車をながめながら、ニコニコ然と朝飯の膳に坐つたが、奥さんの心づくしの鯛の潮煮を美味そうに突ついているうちに、フト、二三度眼を白黒さした。それから汁椀をソツと置いて、大きな飯

の固まりを二ツ三ツ、頬張っては呑み込み呑み込みしたと思うと、真青になつてガラリと箸はしを投げ出してしまった。奥さんが仔細わげを尋ねる間まもなく立ち上つて、帽子を冠つて、新しい靴下の上から、古い庭にわ穿ばきを突かけると、自転車に跨またりながらドンドン都の方へ走り出した。

一時間ばかり走つて、やっと都の中央の、目貫めぬきの処に開業している、遠藤という耳鼻咽喉科病院の玄関に乗りつけた松浦先生は、滝のように流る汗を拭き拭き、通りかかった看護婦に名刺を出して診察を頼ん

「鯛の骨が咽喉のどへかかりましたので……どうかすぐに先生へ……」

間もなく真暗な室へやに通された松浦先生は、白い診察服を着けた堂々たる遠藤博士と、さし向いに坐りながら、禿頭はげあたまをペコペコ下げて汗を拭き続けた。

「そんな訳で、気が急せいておりましたせいか、こここの処に鯛の骨が刺さりまして、痛くてたまりませんので……実は先年、講習会へ参りました時に、先生のお話を承りまして……ある老人が食道に刺さった鯛の骨を

放任しておいたら、その骨が肉の中をめぐりめぐって、心臓に突き刺さったために死亡した……という、あのお話を思い出しましたので……」

「ハハハハハ……イヤ。あの話ですか」

と遠藤博士は、肥った身体からだを反り気味そにして苦笑した。

「あんな例は、滅多にありませんので……さほど御心配には及ぶまいと思えますが」

「ハイ……でも……実は、悴せがれが、来年大学を卒業致しますので、それまでに万もしも一の事がありましたらは申訳あり

ませんから、念のために是非一ツ……」

「イヤ……御尤もごもつとで……」

と遠藤博士は苦笑しいしい金ぶち眼鏡をかけ直して、ピカピカ光る凹面鏡おうめんきょうを取り上げた。松浦先生の口をあけさせて、とりあえず喉頭鏡を突込んでみたが、そこいらに骨は見当らなかつた。けれども痛いのは相変らず痛いというので、それでは食道鏡を入れてみようという事になった。

松浦先生は食道鏡というものを初めて見たらしかつたが、奇妙な恐ろしい恰好の椅子に坐らせられて、二

名の看護婦に両手を押えられたまま食道鏡の筒をさしつけられると、フト又青い顔になって遠藤博士を見上げた。

「これが……胃袋を突き通した器械で……」

と云いかけて口籠もった。遠藤博士は嘔ふき出した。

「アハハハハハ、あの話を御記憶でしたか。あれはソ

ノ何ですよ。あれは西洋で初めて食道鏡を使った時の

失敗談で、手先の器用な日本人だったら、あんなへマ

な事をする気遣きづかいはありませんよ。サア、御心配なく

口を開いて……もつと上を向いて……そうそう……」

食道鏡が突き込まれると、松浦先生は天井を仰いだまま、開口器を噛み砕くかと思うほど苦悶し初めた。大粒の涙をポトポト落しながら、青くなり、又赤くなつたが、そんなにして残りなく調べてもらつても、骨らしいものはどこにも見つからなかつた。

しかし、それでも唾を飲み込んでみると、痛いのは相変わらず痛いというので、思い切つて今一度診^みてもらいたいと云い出した。遠藤博士も苦笑しいしい、今一度食道鏡を突込んだ。

こうして、三度までくり返したけれども、骨は依然

として見付からない。しかし痛い処はやはり痛いとい
うので、流石さすがの遠藤博士も持て余したらしく、懇意な
X光線の専門家に紹介してやるから、そこで探しても
らったらよかろう……と云つて名刺を一枚渡した。

X光線によつて照し出された鯛の骨の在ありか所を、正面
と、横からと、二枚の図に写してもらつた松浦先生は、
又も遠藤博士の処に引返して来たが、博士はたった今
急患を往診に出かけたといふので、今度は町外れに在
る大学の耳鼻科に駆け込んだ。

そこには若い医員が一パイに並んで診察をしていたが、その中の一人が、松浦先生の話をしきくと、X光線の図には一瞥いちべつだも与えないで冷笑した。

「……馬鹿な……そんな小さな骨がX光線レントゲンに感じた例はまだ聞きません。こちらへお出でなさい。とにかく診みてあげますから」

といううちに松浦先生を別室に連れて行って、又も奇妙な、恐ろしい形の椅子に腰をかけさせた。しかしその時には松浦先生の食道が、一面に腫はれ爛ただれて、食道鏡が一寸触さわつても悲鳴をあげる位になっていたので、

若い医員はスコポラミンの注射をしてから食道鏡を入れた。

けれども、ここで又三回ほど食道鏡を出したり入れたりさされているうちに、松浦先生はもうフラフラになつてしまった。

「もう結構です。骨が取れましたせいか、痛みがわからなくなりましたようで……その代り何だか眼がまわりますようで……」

いなか、の、じけん
157
「それじゃ、このベッドの上で暫く休んでからお帰りなさい。注射が利いているうちは眼がまわりますか

と云い棄てて、若い医員は立ち去った。

松浦先生は……しかしベースボールの方が気にかかっていたかして、そのまま自転車に乗って大学を出たらしかった。そうして途中で注射がホントウに利き出して、眼が眩くらんだものらしく、国道沿いの海岸の高い崖の上から、自転車もろともころげ落ちて死んでいるのが、間もなく通りかかりの者に発見された。

その右の手には、X光線の図を二枚とも、固く握り締めていたという。

赤い鳥

村外れの網干場あみほしぼに近い松原を二三百坪切り開いて大

きな別荘風の家が建った。海岸の岩の上には見事なモーターボートを納めた倉庫まで出来た。そうして村

いなか、の、じけん
一番のオシヤベリで、嫌われ者のお吉という婆さんが雇われて、留守番をする事になった。それまでの噂や、その婆さんの話を総合すると、その別荘を建てた人は有名な相場師であるが、その若大将の奥さんがからだ身体が

弱いので、時々保養に来るために、わざわざ建てたものだという事である。

村の者は皆その贅沢さに眼を丸くした。誰もかれもその若大将の奥さんを見たがった。

「この界限で家を建てて、棟上げの祝いを配らずに済ます家は、あの別荘だけじゃろ」

などと蔭口を利くものもあつた。しかしその別荘は出来上つてから三箇月ばかりというもの閉め切つたまんまで、若い奥さんは影も形も見せなかつた。

ところが真夏の八月に入った或る日の事、鯛網引きたいあみひ

の留守で、村中が午睡ひるねをしている正午ひるさか下り時分に、ケ
タタマシイ自動車の音が二三台、地響じひびきを打たして別荘
の方へ走って行った。何しろ道幅が狭いので、家毎ごごとに
ユラユラと震動して、子供などは悲鳴をあげながら怯おび
えた位であつた。眼を醒さました女房達の中には、火の
付くように泣く子供を背中に掴み上げて、別荘の方へ
駆け出した者もあつたが、そんな連中はすぐあとから
来た四五台の自動車に追つ払われて、逃げ迷わなけれ
ばならなかつた。

「別荘の中は殿様の御殿のように、立派な家具家財で

飾つてあるよ」

「女中みたような若い女が二人と、運転手が下男みたような男衆が六七人とで、そんな家具家財を片付けながら、キヤツキヤツとフザケ合つていたよ」

「六七台の自動車は日暮れ方にみんな帰つてしまつて、あと後には若い女中二人と、お吉婆さんと、青い綺麗な籠に這入つた赤い鳥が一羽残つているんだよ」

「その赤い鳥は奇妙な声で……バカタレ……馬鹿タレエツて云つていたよ」

というような事実が、その夕方、沖から帰つて来た

村中の男達に、大袈裟な口調で報告された。それを聞いた男たちは皆眼を瞠みはつた。

「ウーム。そんならその奥さんチウのはヨツポド別嬪べっぴんさんじゃろ」

「いつ来るんじやろ。その別嬪さんは……」

「あたしや初めあの女中さんを奥さんかと思うたよ。」

「あんまり様子が立派じゃけん」

「あたしもそう思うたよ。……けんど二人御座るのも可笑おかしいと思うてナア」

「お妾さんチウもんかかも知れんテヤ」

「ナアニ……その赤い鳥が奥さんよ」

「……どうしてナ……」

「……どうしてちうて……ウチの赤い鳥でも、毎日のように俺の事を、バカタレバカタレ云うてケツカルじゃないか」

そんな事を云い合つてドツと笑いこけながら、海岸に咲き並ぶ月見草を押しわけて帰る連中もあつた。

そのあくる日のやはり夕方近くの事……本物の若い奥さんは、若大将と一緒に自動車で別荘に乗りつけた。

そうして着物を着かえると直ぐに、夫婦づれで海岸から村の中を散歩してまわった。

奥さんは村の者の予期に反して別嬪でも何でもなかつた。赤い毒々しい色の日傘の中に一パイになるくらい大きなハイカラ髪に結つて、派手な浴衣ゆかたに紫色の博多帯をグルグルと捲き附けたまま、反り身そみになつて村中を歩いて行つた。青白く痩せこけた上にコテコテとお化粧をした……鼻の頭がツンと上を向いた……眼の球のギョロギョロと大きい……年はいくつかわからぬ西洋人のようにヒョロ長い女であつた。又、若大

将の方は三十前後であろうか、奥さんよりもズツ背の低いデブデブの小男であつた。派手な格子縞こうしじまの浴衣へこおびに兵児帯を捲きつけて、麦稈帽むぎわらぼうを阿弥陀あみだにしながら、細いステッキを振り振りチヨコチヨコと奥さんの尻を逐おうて行くところは、如何にも好人物らしかつた。中には奥さんのお伴ともをしに来た書生さんと思つた者もあるらしかつたが、その二人が広くもない村の中を一通りあるきまわると、夕あかりの残つた網干場を別荘の方へ通り抜ける時に、こんな話をした。

「ねえあなた。いい景色じゃないの……明日あしたは早く起

きてモーターボートで島めぐりをしてみない」

「……ウウン……な風いでいたら行つてみよう」

「……だけどコンナ村に住んでいる人間は可愛想なもののね。年中太陽にさら晒されて、豚小屋みたいな処に寝ころんで……」

「ウーン。女でも男でもずいぶん黒いね。トテモ人間とは思えない」

「男はみんなゴリラで、女はみんな熊みたいに見えるわよ」

「ハハハハ、ゴリラかハハハ」

「ホホホヒヒヒヒ」

すると、ちようど網干場のまん中の渋小屋しぶこや（網に渋を染める小屋）の蔭で遊んでいた子守女こもりが二三人、鳴りを鎮めて二人の会話に耳を傾けていたのであつたが、こうした言葉をきくと流石さすがに憤慨したものと見えて、子供を背負しょい上げながら大急ぎで村へ帰つて来た。そうして村の連中が夏祭りの相談をしながら、一杯飲んである処へやつて来て、口々に忠実めかして報告した。只さえ気の荒い外海そとうみ育ちの上に、もういい加減酔払つていた若い連中は、これを聞くと一時に殺氣立つ

てしまった。中にも赤禪一貫で、腕へ桃の刺青いれずみをした村一番の逞ましいのが、真先に上りあが框かまちに立って来てどな呶鳴どなった。

「……何コン畜生……ごりら、タア何の事だ……」

「……知らんがナ……」

と子守女こもりたちは見幕あとしきに恐れて後退りあとしきをした。

「……ナニイ知らん……知らんタア何じゃい……」

「何でもええがッ……畜生メラ。この村を軽蔑してケツカルんだッ」

「第一この村の地内じないに家うちを建てながら、まだ挨拶にも

失せおらんじやないか」

「……よしッ……みんな来いッ。これから行つて談判喰らわしてくれ」

「……よし来た……喧嘩なら俺が引き受けた。モノと返事じゃ只はおかせんぞ」

と云ううちに四五人バラバラと立ちかけた。その時であつた。

「……マア待て待て……待て云うたら……」

シヤガレた声で上座かみざから、こう叫んだ向う鉢巻の

はげあたま
禿頭は、悠々と杯を置いて手をあげると、真つ先きに

立った桃の刺青を制し止めた。

「何だいトツツアン……又止めるんか」

「ウン。止めやせんがマア坐つとれい。俺は俺で考えとる事があるから……」

「フーン……そんなら聞こう」

と桃の刺青が引返して坐つた。ほかの連中もドタドタと自分の盃の前に尻を据えた。

「……ドンナ考えかえ……トツツアン……」

「考えチウてほかでもない。今度の夏祭りナア……ええか……今度の夏祭り時にナア……ええか……」

禿頭はニヤニヤ笑いながら桃の刺青の耳に口を寄せた。子守女こもりたちに聞こえぬようにささやいた。

「……ナ……ナ……そうしてナ……もしそれを、それだけ出さんと吐ぬかしおつたら構う事アない。あの座敷にお獅子様を担なまぐさぎ込むんよ。例の魚血なまぐさを手足に塗りこくつて暴れ込むんよ……久し振りにナ……」

「……ウム……ナルホド……ウーム……」

「……ナ……高もりが守こツ子の云う事を聞いて、云いがかりをつけるよりも、その方が洒落しやれとらせんかい」

「ウン。ヨシッ。ワカッタッ。みんなであの座敷をブ

チ毀こわしてくれよう」

「シイツ。聞こえるでないか……外へ……」

「ウン。……第一あの嬢かかあ面づらが俺ア気に喰わん。鼻ッ
ペシを天つう向けやがつて……」

「アハハハハ。あんなヒヨロツコイ嬢かかが何じやい。俺
に抱かして見ろ。一ト晩でヘシ折つて見せるがナ」

「イヨーツ豪えらいゾツ。トツツアン。そこで一杯行こう
ぜ……アハハハハハハ」

「ワハハハハハ」

そんな事でその時は済んだが、サテそのあくる日の

ぞきこんだ。

その顔を見ると人なつこいらしい赤い鳥は、突然頭を下げて叫び出した。

「モシモシ。モシモシイ。コンチワ……コンチワコンチワ……」

二人の子供はビックリして砂だらけの顔を見合わせた。

それを見ると赤い鳥はイヨイヨ得意になつたらしく、一心に子供の顔を見下しながら、低い声で歌を唄い出した。

「……ジャン、チエーコン、リウコン……コンリウ、コンジャン、チエーコンチエー……チエーリウコンコンジャンコンチエー……じゃんすいじゃんすい、ほうすいほうすいほう……すいすいじゃんすい、ほうすいほう……」

子供は又も黒い顔を見合わせた。

「何て云いよるのじゃろか」

「……お前たちの事をバカタレって云っているんだよ……ホホホホ」

という声が不意に背後うしろの方から聞こえたので、二人は又もビックリして振り向いた。見るとそれはこの別

莊の若大将夫婦で、たつた今ボート乗りから帰つて来たものらしく、二人とも眩まぶしいほど白い洋服を着て、濡れ草履ぞうりを穿はいて、ニコニコしながら突立つていた。

二人の子供はホツと安心したように溜め息を吐ついた。そうして又も不思議そうに赤い鳥の方を振りかえつた。

「……エー皆さん……エー皆さん……私は……私は……すなわち……すなわち……」

と赤い鳥は又別の事を云い出した。それにつれて奥さんは、日の照りかかる小鼻に皺しわを寄せながら笑い出した。

「ホーラネ……ホホホホホ……お前さん達の顔を見て馬鹿タレって云っているでしょう……ネーホラ……バカタレーツて……」

「……ちがう……」

と大きい方の児こが眼をパチパチさせながら云い放つた。イクラカ憤慨したらしく黒い頬を染めながら……しかし若い奥さんは凹へこまなかつた。イヨイヨ面白そうに金歯を出して笑った。

「イイエ……よく聞いて御覧……ホーラ……ネ……バカタレーツ……バカタレーツ……てね……ね……ホッ

ホツホツホツ」

この笑い声を聞くと赤い鳥は、一寸頭ちよつとを傾けているようであつたが、忽ちたちま思い出したように。パタパタと羽ばたきをした。籠の格子に掴まって、子供の顔を睨み下しながら、一際ひときわ高く叫び出した。

「……バカタレーツ……バカタレーツ……バカタレーバカタレバカタレバカタレバカタレエーツ……」

いなか、の、じけん
そう云う赤い鳥の顔を、眼をまん丸にして見上げていた大きい方の児が、みるみる洗面を作り出した。眼に涙を一パイ溜めたと思うと、口惜しそうにワーツと

泣き出して、テングサの束を投げ出したまま裏木戸の方へ駆け出した。小さい方の児もテングサの雫しずくを引きずり引きずりあとから跟ついて出て行つた。笑いころげる夫婦の声をあとに残して……。

大きい方の児は、すぐに網干場に駆け込んで、そこに突立っている赤禪の、桃の刺青をした男に縋すがり付いた。そうして一層泣き声を高めながら別荘の方を指ゆびさして、切れ切れに訴えはじめた。

桃の刺青はウンウンうなずきながら聞いていたが、

そのうちに二三度鉢巻を締め直した。青筋を立てて怒鳴った。

「……エエわからん……まつとハツキリ云え……ナニイ……あの別荘の奴等がか……ウンウン……あの赤い鳥にバカタレと云わせたんか……ウンウン……それに違くないナ」

横に立っていた小さい児も、指を啣くわえたまま、大きい児と一緒にうなずいた。

「……ヨシツ……わかった……泣くな泣くな……畜生めら……そんな了りょうけん簡で、あの赤い鳥を連れて来腐きくさった

んだナ……ヨシツ……二人とも一緒に来い……」

と云うより早く網を押しわけて別荘の方へ駆け出した。

しかし裏口から赤煉瓦の中へ這入つてみると、別荘の中はガランとしていて、人の気はいもなかった。ただ表の植込みから蝉せみの音が降るように聞こえて来るばかりなので、桃の刺青はチョツと張り合いが抜けた体ていであつたが、そのうちに小松の蔭に吊してある、青塗りに金縁きんぶちの籠を見付けると、又急に元気附いた。

「コン畜生……ひねり殺してくれろ」

と独言を云い云い籠の口を開けて、黒光りに光る手首をグツと突込んだ。

赤い鳥は驚いた。バタバタと羽根を散らして上の方へ飛び退いたが、なおも真黒い手が掴みかかって来るのを見ると、その手の甲へ勇敢に逆襲して、死に物狂いに喰い附いた。

「アツ……テテツ……テテエテテエテテエツ……」

桃の刺青も一生懸命になった。深く刺さった鉤型のかぎがた嘴をくちばし一気に引き離すと、黒血のしたたる手首を無我夢

183 中にふりまわしたが、そのはずみに籠の底が脱けて

バツタリ落ちたので、赤い鳥は得たりとばかり外へ飛び出して、見る見るうちに遠い松原の中に逃げ込んでしまった。

「……君は一体何をするんだ……」

鳥のあとを逐おうて二三步馳け出したまま、ボンヤリと焼け砂の上に突立っていた桃の刺青は、突然にうしろから怒鳴り付けられたのでビックリして振り返った。見ると浴衣がけの若大将が湯上りの身体からだをテラテラ光らせながら、小さな眼を光らして縁側に突立っていた。

そのうしろから寝巻をしどけなく着た奥さんが、咽喉のどをピクピクさして泣きじやくりながら、帯を捲き付け捲き付け出て来る模様であつた。

「……二百円もする鳥を何で逃がした……うちの家内が吾わが児このようにしていたものを……」

若奥さんは帯を半分捲き付けたままベタリと縁側に坐つた。ワーツ……と泣き出しながら板張りへ突伏した。

桃の刺青はこれを見ると肩を一つゆすり上げた。又も勢い付けられながら血だらけの手で鉢巻を締め直し

「…………ナ…………何をするたア…………ナ何だ。貴様等ア…………あの赤い鳥を使つて、俺の弟を泣かせたろう…………村中の人間をバカタレと…………イ…………云わせたらう…………」

「…………そんなオボエはないぞ…………」

「…………何オツ。この豚野郎…………証拠があるぞツ…………」

「…………証拠がある筈はないぞ…………鳥が勝手に云つたんだから…………」

「…………ウヌツ…………」

「…………アレーツ…………」

桃の刺青はイキナリ土足で縁側に飛び上ろうとしたが、グイと若旦那に突き落された。その力が案外強かったので、桃の刺青はチョット驚いたらしかったが、喧嘩自慢の彼はなおも屈せず、庭下駄にわげたば穿きで降りて来た若旦那を眼がけて掴みかかった。

けれども柔道を心得ているらしい若旦那の腕力には敵かなわなかった。砂の上に息詰まるほどタタキ投げられた上に、尻ペタをイヤという程下駄で蹴け付けっられてしまった。しかも、それをヤツト我慢しながらようように頭を上げてみると、若旦那はいつの間にか縁側に

上つて、女たちと並んで見ているのであつた。

桃の刺青は真青になつて、唇を嚙んだ。起き上るや否や、

「覚えていろツ」

と云い棄てて裏口から飛び出した。村中を駆けずつて仲間を呼び出してまわつたが、その仲間の四五人が、冷酒ひやざけの勢いに乗じて別荘に押しかけた時分には、若旦那夫婦と女中二人を乗せたモーターボートが、大風おおなぎの沖合はるかに、音も聞こえない処すべに近づいていたのであつた。

桃の刺青の仲間はいよいよ腹を立てた。炎天を走つて来たお蔭で、一時に上あがつた冷酒の悪酔いと一緒に、別荘の中へあばれ込んで、戸障子や器物を片っ端からタタキ毀こわし初めた。それを押し止めに出来たお吉婆さんまでも序ついでにタタキ倒おしてしまつたが、その婆さんの報告で駐在巡査が駆け付けると、すぐに桃の刺青を取り押えて、ほかの四五人と一緒に裸はだか体のまま本署へ引っぱつて行つた。

村中は忽ち大騒ぎになつてしまつた。この塩梅あんばいでは四五日のうちに迫つている夏祭りがトテモ出来まいと

いうので、年寄達が寄り合ったり、村長と区長が夕方から警察に陳情に行ったりしたが、そのうちに別荘の持ち主の方で、告訴しないように取計らった事が、町から電話で知らせて来たとかで、間もなく若い者たちは放免されることがわかったので、やっと村中が落ち付いた。

一方に別荘はこの騒動のあつた日から、門も雨戸もスツカリ閉め切つて、空屋同然の姿になつてしまつたが、そのあくる日のこと……村の女房や守もりつ娘こが四五人づれで、恐る恐る様子を見に行つてみると……雨戸

の外の小松の蔭にブラ下がった底無しの籠の中に、いつの間にか赤い鳥が帰っていた。そうして昨日きのうの残りの餌をつつきながら一生懸命で叫んでいた。

「馬鹿タレ……バカタレエ……バカタレバカタレバカタレバカタレエツ……」

八幡まいり

収穫とりのいれが済んだあとの事であつた。亭主の金作が朝早くから山芋掘りに行つた留守に、あんまりお天気がいので、女房のお米よねは家うちを閉め切つて、子守女こもりのお千代に当歳の女の児こを負わせた三人連れで、村から一里ばかりあるH町の八幡宮に参詣さんげいした。

帰りかけたのは午後の一時頃であつたが、お宮の裏の近道に新しく出来たお湯屋を見かけると、お米は

チヨット這入はいつてみたくなつたので、誰も居ない番台
 の上に十銭玉を一つ投げ出して板の間に上つた。眼を
 醒さましかけた子供に乳を飲まして寝かしつけて、ネン
 ネコ絆纏ぼんでんに包んで、隅ツ子の衣類棚きものの下に置いて、活
 動のビラを見まわつたりしながら、お千代と一所いっしょに湯
 に這入つたが、ちようど人の来ない時分で、お湯が
 生温なまぬるかつたので、二人はいい気持になつて、お湯の中
 でコクリコクリと居ねむりを初めた。

そのうちに一かたげ眠つたお米はクサメを二ツ三ツ
 して眼を醒ましたが、高い天窓越しに、薄暗く曇つて

来た空を見ると、慌てて子守のお千代を揺り起した。

「チヨット。あかし妾は洗濯物をば取り込みにやならぬ。一

足先に帰るけに、お前はあとから帰つて来なさいよ。

湯銭ゆせんは払うてあるけに……」

お千代は濡れた手で眼をコスリながらうなずいた。

お米はソソクサと身体からだを拭いて着物を着て、濡れた髪を掻き上げ掻き上げ出て行つた。

それからお千代は又コクリコクリと居ねむりを初めたが、そのうちに鼻から湯を吸い込んで噎むせ返つてい
るうちにスツカリ眼が醒めてしまったので、ヤツト湯

から上つて、まだねむい眼をコスリコスリ身体を拭いた。赤い帯を色気なく結んで表に出ると、長い田圃道をブラブラと、物を忘れたような気もちで歩いて帰った。

帰り着いてみるとお神かみさんは、又も西日がテラテラし出した裏口で、石の手てうす白をまわしながら、居ねむり片手に黄きな粉こを挽ひいていた。それでお千代も石白につらまつて、一所にウツラウツラしいしい加勢をしていたが、そのうちに四時頃になつて夕蔭がさして来ると、山芋をドツサリ荷かついだ亭主の金作が、思いがけなく早

く、裏口から帰つて来た。

金作は界限でも評判の子煩悩こぼんのうであつたが、山芋を土間に投げ出して、いつも子供を寝かしておく表の神棚の下まで来ると、そこいらをキョロキョロと見まわしながら、大きな声で怒鳴つた。

「オイ。子供はどうしたんか」

お米は妙な顔をしてお千代を見た。お千代も同じような顔をしてお米の顔を見上げた。

「オイ。どうしたんか……子供は……」

と亭主の金作は眼を丸くして裏口へ引つ返して来た。

お米はまだお千代の顔を見ていた。

「お前……背負うて来たんやないかい」

お千代もお米の顔をポカンと見上げていた。

「……イイエ……お神さんが負うて帰らつしやつたか
と思うて……妾わたしや……」

二人は同時に青くなつた。聞いていた金作も、何か
わからないまま真青になつた。

「……どうしたんか一体……」

「あたし……きよう……八幡様にまいって……」

「……ナニ……八幡様に参つて……」

「……お宮の前のお湯に這入って……」

「……ナニイ……お湯に這入っタア……何なんしに這入っ
たんか……」

「……」

「それからドウしたんか」

「……」

「……泣いてもわからん……云わんかい」

「……落おといて来たア……」

「……ワア——ア……」

金作は二人を庭へタタキ倒した。黄な粉を引つくり

返したまま、大砲のような音を立てて表口から飛び出した。

お米も面喰めんくらつたまま起き上つて、裏の田圃へ駆け出した。田を鋤すいている百姓を見付けると、金切声を振り絞つた。

「大変だよ。ウチの人と一所に行つておくれよ。子供が……子供が居なくなつたんだよ……」

一方に八幡裏のお湯屋では、亭主と、巡査と、近所の人や二三人、番台の前で評議をしていた。その中で巡査は帳面を開いたまま、何かしら当惑しているらし

かったが、やがて髭をひねりひねり亭主をかえりみた。
「子供を棄てる奴が湯に這入って帰るチウは可笑しい
じゃないか。ア——ン」

「へエ。……でも十錢置いてありますので……」

「フ——ン。釣銭は遣らなかつタンカ」

「へエ。いつ頃這入ったやら気が付きませんじやった
ので……」

「迂濶うかつじゃナアお前は……。罰を喰うぞ気を付けんと

……」

「へエ。どうも……これから心掛けます」

「つまり湯に這入るふりをして棄てたんじゃナ」

「へエ……じゃけんども、ヒヨットしたら落おといて行つたもんじゃ御座いませんでしよか」

「馬鹿な……吾わが児こを落す奴があるか」

その時に男湯の入口がガラリと開あいて、百姓姿の男が一人駆け込んで来た。そうして何か戸惑いでもしたように、誰も居ない男湯の板の間を見まわしながらキョロキョロしていたが、そのうちにヤツト気付いたらしく、女湯の入口にまわると、泥足のまま巡査を突き退のけて、ハヤテのように板の間に駆け上つた。……

と思うと、そのあとから又二三人、野良姿の男がドカドカと這入つて来た。

「居ったカッ」

「居ったッ」

いなか、の、じけん 備考

みんな、私の郷里、北九州の某地方の出来事で、私が見聞致しましたことばかりです。五六行程の豆記事として新聞に載ったのもありますが、間の抜けたところ、却って都に住む方々の興味を惹くかも知れぬと存じまして、記憶しているだけ書いてみました。場所の事もありますので、場所と名前を抜きにいたしましたことをお許し下さい。



いなか、の、じけん
夢野久作 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「夢野久作全集 4」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成 4）年 9 月 24 日第 1 刷発行

底本の親本：「冗談に殺す」日本小説文庫、春陽堂

1933（昭和 8）年 5 月 15 日発行

入力：柴田卓治

校正：江村秀之

2000 年 1 月 13 日公開

2006 年 3 月 13 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.3(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ